令和３年度
【短期研究２】

感染症がもたらすスティグマと心理的支援に関する研究

（要旨）
感染症パンデミック期の心理的影響とその対策について、スティグマに焦点をあて、ガイドライン作成の資料収集を目的とした研究１と研究Ⅱを実施した。研究Ⅰでは、スティグマに関する項目を新たに加え、前年度同様にCOVID-19メンタルヘルス対策のマニュアル・ガイドラインリストを作成した。また、研究Ⅱでは、新興感染症としての新型インフルエンザＡ（H1N1）を対象に、パンデミック期の人々の心理や情報提供、リスクコミュニケーションのあり方とスティグマに焦点をあてた先行研究のレビューを実施した。

研究Ⅰにおいては、89件（前回30件を含む）のガイドラインを選出した。前年度のリストでは、子どもや家族等を対象としたガイドラインは3件のみであったが、今年度は、教育・保育関係者・子どもと家族用の資料は30件に及んだ。また、スティグマに関係するガイドラインを15件抽出することができた。今回抽出したガイドラインの特徴として、対象者や状況が細分化され、より現場に対応された内容となっていた。ガイドラインの中には、何度も更新または改定している資料もあり、利用者のニーズに応えた内容で改定されていた。COVID-19パンデミックの終息の目途がまだ立たない現状ではあるが、今後も状況に合った新たなガイドラインが作成されると考えられ、本研究も継続して実施する必要がある。

研究Ⅱでは、2009年にパンデミックとなった新型インフルエンザを対象に、パンデミック期の人々の不安やストレス、感染症の情報提供のありかたやリスクコミュニケーションとスティグマに焦点をあて、先行研究をレビューした。検索には、CiniiJ-STAGE、医中誌WEB、IRDBを用い、最終的に11本の文献を分析対象とした。感染に対する不安については、大学生等の若い世代はあまり不安を感じることがなく、対して子どもを持つ親は、不安感が多いことが示された。新型インフルエンザの情報に関しても若い世代は情報収集に積極的な態度が見られず、感染予防行動も少なかった。今後の課題として、若い世代への情報発信の方法等パンデミック期における世代に応じた情報提供のあり方の必要性が見出された。また､感染症パンデミック期のリスクコミュニケーションのありかたとして、リスク認知を高めると、感染予防行動は高くなるが、危険回避行動として、感染者を退ける差別や偏見、スティグマが発生する可能性が示唆された。今後はスティグマを発生させないリスクコミュニケーションのあり方が重要となることが示された。

研究体制：中塚志麻、亀岡智美、加藤寛

研究Ⅰ　COVID-19 メンタルヘルス対策に関するマニュアル・ガイドラインリストの作成Ⅱ

Ⅰ　はじめに

中国の武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症（以下 COVID-19）は、2020 年 3 月に WHO が「パンデミック」を宣言してから、2 年を迎えようとしている。この期間、感染予防を軸とした新しい生活様式や行動制限の要請等の行動変容がメンタルヘルスに及ぼす影響は、本邦だけでなく世界的な問題となっている[1)]。このように COVID-19 の流行は、健康被害だけでなく深刻な心理社会的影響をもたらしている。特に感染者やその関係者に対する差別・偏見の問題は、重要かつ喫緊の課題である。実際に感染者やその家族、クラスターが発生した施設や関係者に対する差別的な行為についての報道が多く見受けられた[2) 3)]。このような差別や偏見は、当事者に負の烙印であるスティグマを生じさせ、差別や偏見の単純加算を超えた脅威を生み出していく。さらにスティグマは、当事者の自責感や脱価値観を生み出し、自身に負の烙印を押すセルフスティグマにつながっていく[4)]。セルフスティグマが発生すると、当事者は社会からの差別や偏見を恐れることで、受療行動を制限し、結果的には感染拡大にもつながってくる[5)]。また、感染の危険があり質量ともにストレスが多い医療従事者等にとってはバーンアウトの要因にもなりかねない[6)]。スティグマ軽減の重要性に関しては、COVID-19パンデミック期初期から注目されており、2020年2月に、ユニセフ、WHO 等が「COVID-19 に関する社会的スティグマの防止と対応のガイド」[7)]を作成している。

本研究では、昨年度作成したメンタルヘルス対策のガイドラインの収集を継続して行い、スティグマ軽減に関するガイドラインを加えてリストを作成し、今後の COVID-19 に対する心のケアのガイドライン作成に役立つ資料を集積することを目的とした。

Ⅱ　研究方法

2020 年度の研究報告に引き続き、COVID-19 に関する国内外の学術集会や病院、機構等社会的に信頼性の高い組織が発信するガイドライン・マニュアルを検索した。さらに昨年度収集したガイドラインの更新の有無を確認した。また、差別・偏見・スティグマ軽減に関するガイドラインの項目を追加した。リスト作成シートには、①タイトル　②URL学会・機関名　③発信日　④要支援対象者　⑤主な内容　の項目立てをし、内容を整理した。

Ⅲ　結果

ホームページやリンク集等で紹介されている URL の中で重複しているものを整理し、合計で 89 件（前回 30 件を含む）を選出した。対象読者別では、精神医療関係者用 10 件、医療従事者用 7 件、医療保健・コミュニティーのリーダー用 2 件、感染者及びその関係者用 2 件、医療従事者・心理・福祉領域の支援者用 4 件、教育・保育関係者・子どもと保護者用 30 件、医療従事者～全ての人々用 19 件、差別・偏見・スティグマの防止と対応 15 件となった。情報の発信日は、2020 年 3 月から 2022 年 2 月までであった。（表 1～表 8）

表１　精神医療現場関係者用

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	精神医療における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策について	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/20200427.pdf 日本精神神経学会災害支援委員会	2020.5.1	・精神医療現場関係者	精神医療におけるCOVID-19対策について、以下の項目が記載されている。 １）医療圏における感染症対策の体制構築 ２）精神科病床における感染防止、拡大防止のための対策 ３）精神科病床で感染症が発生した際の早急な対策・対応 ４）一般病院、総合病院、大学病院について
2	働く人のメンタルヘルスケアや産業保健体制に関する提言	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/20200516_03r.pdf 日本精神神経学会 精神保健に関する委員会 産業保健グループ	2020.5.16	・医療、介護現場を含めたコロナ感染症下で通常活動をする労働者	働く人のメンタルヘルスケアや産業保健体制に焦点を合わせた問題提起と提言を以下の項目で記載。 １）コロナ感染症が労働者の心理・社会面に及ぼす影響についての正しい理解 ２）コロナ感染症に対応できるメンタルヘルス体制の確立。 ３）新しい働き方が労働者のメンタルヘルスや産業保健体制に及ぼす影響と対策。 ４）長期間の健康観察となった労働者のメンタルヘルス対応方法 ５）倒産・ 解雇による失業とメンタルヘルス不調者の増加、自殺者の増加対策 ６） 社会的活動制限下における、精神疾患の持病そのものへの対応の検討
3	「コロナ関連自殺」予防について学会員向け提言書	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/20200516_01r.pdf 日本精神神経学会 精神保健に関する委員会 自殺予防グループ	2020.5.16	・感染者 ・経済的困窮者 ・子ども、若年者 ・医療スタッフ等自殺リスクの高い人	コロナ関連自殺の増加が懸念される中、自殺予防に関する以下の共有資料の提供 １）災害の視点からの知見 ２）経済的困窮に関して ３）新型コロナウイルス感染症爆発がメンタルヘルス・精神疾患に与える影響 ４）治療と支援 ５）子ども・若年者の自殺予防対策について 等
4	新型コロナウィルス感染症（COVID-19)パンデミック下において親子・学校・女性のメンタルヘルスのサポート役割を担っていく学会員や、保護者・女性へのメッセージ	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/20200516_02r.pdf 日本精神神経学会 精神保健に関する委員会 親子・学校・女性グループ	2020.5.16	・精神科医 ・社会的に弱い立場にある子どもや一部の女性	コロナ禍の中で精神科医が地域の精神保健において、親子・学校・女性のメンタルヘルスのサポート役割を担っていくための共有すべき内容を以下の項目で記載。 １）急性期の子ども・家族への心理的サポートの目的 ２）災害が子ども,家族,女性にもたらす影響 ３）感染症災害の特異性について ４）支援者自身のセルフケア ５）子どもと家族のケアについて 急性期を脱した中期・晩期に予想されること・留意すべきこと ６）子どもたちの学校生活における支援 等

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
5	メンタルヘルスに携わる医療者の方へ	https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/gakkai/teigen/covid19.html 日本うつ病学会	未掲載	・メンタルヘルスに関わる医療者	メンタルヘルスに関わる従事者用に様々な機関が発行している資料を以下の項目で整理 １）心理・社会的変化の概要 ２）心理教育 ３）ストレス対策 追加 ４)医療現場における職員のメンタルサポート
6	COVID-19大流行中の物質使用および嗜癖行動に関する短報	https://www.ncasa-japan.jp/pdf/info20200410_jp.pdf WHO	2020. 3 .20	・一般 ・物質使用や嗜癖行動障害のあ　る人 ・医療および社会福祉サービス従事者	COVID-19 大流行中の物質使用および物質使用または嗜癖行動による障害に関連する健康問題について、一般、物質使用や嗜癖行動による障害のある人・医療および社会福祉サービス従事者の対象別で説明。
7	精神医学とCOVID-19のパンデミックに関するWPA 基本方針表明	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/WPA_Position_Statement_Psychiatry_and_the_Covid-19_pandemic-May2020.pdf WPA https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/Japanese_Translated_Ver_WPA_Position_Statement_Psychiatry_and_the_Covid-19_pandemic-May2020.pdf	2020.5 日本語版 2021.2.3	・精神科医、 ・患者、家族、 ・介護者および医療従事者	パンデミック時における精神科医の役割およびパンデミックに起因して生じる精神疾患のある人々の保護に関する倫理的問題および臨床的問題について、以下のトピックによるガイダンスを提供。 １）パンデミック時の精神科医の役割 ２）　精神障害を持つ個人の保護 ３）精神科への入院が必要な患者の対応 ４）外来患者の対応 ５）リソースのトリアージ／優先順位付け等
8	COVID-19 & clinical management of mental health issues 日本語版	http://www.jypo.org/wp-content/uploads/OxfordGL_COVID19_20210111.pdf OXFORD PRECISION PSYCHIATRY LAB	2020.9.1 日本語版 2021.1.10	・精神科医	精神薬を服用中の患者が新型コロナウィルスにり患した際の臨床管理について以下の項目で説明 １）BZ 薬および Z-drug 服用中の患者の管理について ２）クロザピン服用中の患者の管理について ３）デジタル技術と遠隔精神医療について ４）パンデミック時の終末期ケアの在り方。 ５）精神科病棟でのCOVID-19 のリスクを最小化する方策 ６）リチウム治療について ７）長時間作用型の注射可能な抗精神病薬使用中の患者の管理
9	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的大流行下における、こころの健康維持のコツ	https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/gakkai/teigen/data/2020-04-07-2-covid-19.pdf 国際双極性障害学会・光療法・生物リズム学会	未掲載	・一般、特に、うつ病や双極性障害のようなこころの病気を患っている方	国際双極性障害学会と光療法・生物リズム学会 共同発表の日本語版。心穏やかに過ごすために役立つメカニズムのひとつとしての体内時計の役割を説明。体内時計が正確に働くための日常生活を規則的に送るための自己管理術を記載。
10	精神科医療現場における新型コロナウイルス感染症対策事例集 第１版	http://www.tohoku-icnet.ac/covid-19/mhlw-wg/division/psychiatric_medical_institution.html 日本精神神経学会	2021.1.7	・精神医療現場関係者	指針ではなく事例集という形での情報の提供 1）感染予防策 2）医療圏ごとの体制の確保 3）クラスター発生時の対応 4）心理的サポート

表２　医療従事者用

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	新型コロナウイルス流行時のこころのケア	https://interagencystandingcommittee.org/system/files/2020-03/IASC%20Interim%20Briefing%20Note%20on%20COVID-19%20Outbreak%20Readiness%20and%20Response%20Operations%20-%20MHPSS%20%28Japanese%29.pdf 機関間常設委員会Inter-Agency Standing Committee [IASC]	未掲載	・医療者を対象としているが、リスクコミュニケーションやソーシャルサポートなども含まれている	メンタルヘルスと心理社会的支援、国際的な活動などを記載。さらに、高齢者、障害者、子ども、感染対応のために働く者などの支援の在り方について解説
2	コロナウイルスやその他の新興感染症の発生時における患者の心の健康のケア：臨床医向けガイド	https://www.cstsonline.org/assets/media/documents/CSTS_FS_JPN_Caring_for_Patients_Mental_WellBeing_During_Coronavirus.pdf 米国軍保健衛生大学トラウマティック・ストレス研究センター	2020.2.5	・臨床医	医療提供者が、新興疾患に関する不確実性を認識し、患者理解と患者の精神的健康を促進するための内容を以下の項目で記載 １）情報入手 ２）患者教育 ３）誤った情報の修正 ４）情報量の制限 ５）ストレスへの対応 ６）自分と自分の大切な人を守る
3	コロナウイルスのアウトブレイクにおける隔離の心理的影響： 医療従事者が知っておくべきこと	https://www.cstsonline.org/assets/media/documents/CSTS_FS_JPN_Psychological_Effects_of_Quarantine_Providers.pdf 米国軍保健衛生大学トラウマティック・ストレス研究センター	2020.3.26	・医療従事者	隔離の心理的影響と医療提供者が隔離期間中の患者のケアと自身の心の健康にについて、以下の項目で説明 １）隔離中と隔離後のストレス要因について ２）隔離中の心の健康の促進について
4	コロナウイルスやその他の感染症アウトブレイク中における医療従事者の健康維持	https://www.cstsonline.org/assets/media/documents/CSTS_FS_JPN-_Sustaining_WellBeing_Healthcare_Personnel_During_Coronavirus.pdf 米国軍保健衛生大学トラウマティック・ストレス研究センター	2020.2.5	・医療従事者 ・医療管理者	医療従事者において、自身と周囲のセルフケアの重要性と方法を以下の項目で説明。 １）感染症アウトブレイク中における医療従事者の課題 ２）医療従事者の健康維持のための戦略
5	COVID-19パンデミックにおける医療従事者のストレス体験～支援者向けガイド～	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/COVID-19_guide.pdf 日本精神神経学会 日本トラウマティック・ストレス学会	2021.7.7	・医療従事者 ・医療管理者	メンタルヘルス専門家が医療従事者をサポートする際の支援のポイントを記載 1）生命への脅威 2）過酷な労働環境 3）患者・家族の苦悩・死・悲嘆 4）医療従事者に対する差別・偏見
6	医療現場で働いているみなさまへ 終わりが見えづらい強いストレスに対処するために	file:///C:/Users/shima/Downloads/Stress%20management%20for%20health%20care%20workers.pdf 鳥取大学医学部竹田研究室	2020.515	・医療従事者 ・医療管理者	非常時にできる心理学的対処
7	新型コロナウイルス感染症対応に従事されている方のこころの健康を維持するために	https://www.jrc.or.jp/saigai/news/200330_006139.html 日本赤十字社	2020.3.30	・医療従事者	医療従事者がこころの健康を維持するために身近な人同士で互いに助け合い、組織としてサポートすることが重要であることから、職員のためのサポートガイドを策定 1）サポートガイド 2）リーフレット 3）ストレスチェックリスト　等を掲載

表３　医療保健やコミュニティーのリーダー用

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	コロナウイルスやその他の新たな公衆衛生上の脅威直面時の リーダー用リスクコミュニケーションガイド	https://www.cstsonline.org/assets/media/documents/CSTS_FS_JPN_Leaders_Guide_Risk_Communication_Coronavirus.pdf 米国軍保健衛生大学トラウマティック・ストレス研究センター	2020.3.26	・医療保健やコミュニティのリーダー	COVID-19の独特な心理的ストレッサーに対して、コミュニティの人々の管理能力を強化するための効果的で継続的なリスクコミュニケーションの提示
2	コロナウイルスやその他の新興感染症発生に対する準備と対応のためのメンタルヘルス・行動マニュアル	https://www.cstsonline.org/assets/media/documents/CSTS_FS_JPN_Mental_Health_Behavioral_Guidelines_Preparedness_Response_Coronavirus.pdf 米国軍保健衛生大学トラウマティック・ストレス研究センター	2020.2.5	・行政機関 ・公衆衛生に関わる機関	パンデミック期発生におけるメンタルヘルスに対する効果的な準備と対応の手順を、「準備」「早期のアウトブレイクに対する対応」「その後の対応と回復」「メンタルヘルス介入計画」の４つのフェーズに分けて解説

表４　感染者及びその関係者用

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	「感染症流行期にこころの健康を保つために」シリーズ	http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/news/200327_006138.html 日本赤十字社	2020.3.27	・感染者とその関係者・高齢者・基礎疾患のある人とその家族	感染者とその関係者・高齢者・基礎疾患のある人とその家族、周辺の人々に対する対処法や「心の健康」を支えるヒントを記載
2	コロナウイルスやその他の新興感染症のアウトブレイクにおける 家族のケア	https://www.cstsonline.org/assets/media/documents/CSTS_FS_JPN_Taking_Care_of_Your_Family.pdf 米国軍保健衛生大学トラウマティック・ストレス研究センター	2020.3.26	・一般 ・感染者の家族	COVID-19やその他の新興感染症のアウトブレイク時における家族を守る方法を以下の項目で説明 １）最新情報の入手 ２）子供の感染症に関する情報 ３）良い基本的な衛生と予防策 ４）落ち着きを保つための戦略 ５）家族の健康管理に子供を参加させる方法

表５　医療従事者・心理・福祉領域の支援者用

5	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行下におけるメンタルヘルス対策指針	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/COVID-19_20200625r.pdf 日本精神神経学会 日本児童青年精神医学会 日本災害医学会 日本総合病院精神医学会 日本トラウマティック・ストレス学会	2020.6.30	・罹患者 ・検疫対象者とその関係者 ・感染症診療、感染症対策従事者 ・子どもと、その保護者 ・その他ハイリスク者	精神医療に従事する者及び，保健医療，教育，福祉等の関連領域の支援者が COVID-19 に関するメンタルヘルス対策を実施する上で、基本的な情報、認識と取り組むべき課題を以下の項目で整理。 １）地域社会への支援 ２）罹患者・検疫対象者と関係者へのメンタルヘルス支援 ３）感染症診療・感染症対策従事者への支援 ４）子どもと、その保護者への支援 ５）その他のハイリスク者への支援　等
2	新型コロナウィルス感染症関連情報について	https://www.jstss.org/ptsd/covid-19/ 日本トラウマティックストレス学会	2020.4.1	・全ての人々	COVID-19パンデミック期における様々なメンタルヘルス上の問題に対する理解と対応に関する情報を以下の項目で発信。 １）COVID-19パンデミックがもたらす心理的影響トラウマティック・ストレスとの関連から ２）新型コロナウイルス感染症 情報リスト ３）子どもに関する情報リスト ４）新型コロナウイルス感染症とスティグマ ５）わが国に暮らす子ども達への影響 ６）スクールカウンセラーの方々へ ７）COVID-19の対応に関わる医療関係者のケアについて(COVID-19)診療スタッフの感情対処プログラム の紹介 ８）新型コロナウイルス感染症に対する国際連携活動　等
3	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対応する職員のためのサポートガイド	http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/news/pdf/%E6%96%B0%E5%9E%8B%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E3%82%A6%E3%82%A4%E3%83%AB%E3%82%B9%E6%84%9F%E6%9F%93%E7%97%87%EF%BC%88COVID-19%EF%BC%89%E3%81%AB%E5%AF%BE%E5%BF%9C%E3%81%99%E3%82%8B%E8%81%B7%E5%93%A1%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E3%82%B5%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%88%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%89.pdf 日本赤十字社	2020.3.25	・COVID-19流行下で活動する職員	COVID-19流行下で活動する職員が受ける心理・社会的影響を軽減し、職員・家族の尊厳と健康を守ることを目的としたガイド。サポートの内容を、COVID-19対応者・同僚・家族・知人・上司 ・施設管理者の立場で解説
4	新型コロナウイルス感染症（COVID-19)パンデミック下における子どもと家族の心理臨床ガイドライン	https://sacp.jp/wp-content/uploads/2020/07/05c2cb0045472b165abd66c150453491.pdf 認定NPO法人　子どもの心理療法支援会	2020.7.7	・子どもとその家族	子どもと家族の心理臨床に携わる専門家が、子どもたちの心の健康のために何ができるか、あるいはできないかを考え続け、必要な判断をしていくことをサポートするために作成

表6　教育・保育関係者　子どもと保護者用

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	新型コロナウイルスと子どものストレスについて	http://www.ncchd.go.jp/news/2020/20200410.html 国立成育医療研究センター	2020.４.	・子ども	コロナ禍における子どものストレスと対処法について以下の項目で解説。 １）親子でできるストレスコーピング ２）子どもとできるセルフケア ３）リラクゼーション ４）子どもの成長に応じたケア　　等
2	がんばっているみんなへ 大切なおねがい	http://www.jpeds.or.jp/modules/general/index.php?content_id=30　日本小児科学会	2020.４.6	・子ども	自宅で過ごすことの重要性とストレスについて、虐待通報について、わかりやすく説明している。
3	お子様と暮らしている皆様へ	http://www.jpeds.or.jp/uploads/files/20200406_02.pdf 日本小児科学会	2020.４.6	・保護者	落ち着いて安定した気持ちで、子どもと一緒に自宅で過ごすことができる方法を以下の項目で記載。 １）自分の苛立ちを知り、リラックスする ２）家族で不安や苛立ちについて話し合う ３）子どもの不安・ストレスを理解する ４）子どもが話しやすい雰囲気や時間を作る ５）子どもの年齢に応じてCOVID-19について説明する ６）子どもを怒るより褒めることを心がける ７）子どもの自己決定権の確保 ８）子どもらしい活動ができる工夫 ９）悩みや疑問が生じたら、すぐに相談する 10）発達の偏りやメンタルヘルスの問題の子どもに関しては主治医に相談
4	コロナウイルスに関わる子ども向け資料	http://tomokoba.mt-100.com/?p=65 静岡大学教育学　小林朋子研究室　公開資料	2020.3	・子ども	コロナウイルスに関わる子ども向け資料 1）レジりん通信 2）臨時休校中の保健便り素材 3）健康戦士コロタイジャーHP
5	コロナウイルスに関わる教師向け資料担任向け休校中の子ども支援チェックシート	http://tomokoba.mt-100.com/wp-content/uploads/2014/05/%E6%8B%85%E4%BB%BB%E5%90%91%E3%81%91%E4%BC%91%E6%A0%A1%E4%B8%AD%E3%81%AE%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%88-1.pdf静岡大学教育学　小林朋子研究室　公開資料	2020.５.1	・子ども	地域や学校の状況に応じて、子どもや保護者との関係づくりを目的としたアセスメントと必要に応じた支援のための２ステップを記載
6	学校再開時の子ども支援チェックシート	http://tomokoba.mt-100.com/wp-content/uploads/2014/05/%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%86%8D%E9%96%8B%E6%99%82%E3%81%AE%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BC0519.pdf 静岡大学教育学　小林朋子研究室　公開資料	2020.5.18	・子ども	学校再開時の学校がチームとして支援するためのポイントについて記載

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
7	児童生徒や教職員に感染者が出た場合の学校としての対応について	http://tomokoba.mt-100.com/wp-content/uploads/2014/05/943175e568889d27b8d284e92ed1a865.pdf静岡大学教育学　小林朋子研究室　公開資料	2020.8.6	・教育関係者	学校現場で感染者が出た場合の対策について 1）児童・生徒の反応の予測 2）事前準備 3）実際の対応 について記載
8	保護者用：新型コロナウイルス感染症による児童生徒のストレスとその対応について	https://www.ajcp.info/heart311/wp-content/uploads/2020/03/h_3_page.pdf 北海道臨床心理士会	2020.3.3	・子どもと保護者	新型コロナウィルス感染拡大期における子どものストレスとその対応について解説
9	新型コロナウイルス（COVID-19）について子どもに話す	http://www.gakkoushinrishi.jp/syorui/files/corona_1.pdf 日本学校心理士会	2020.2.29	・子どもと保護者	新型コロナウィルスについて、保護者が子どもに説明するためのガイドライン。NASP（アメリカ学校心理士会）・NASN（アメリカ学校看護師会）によって作成され、NASPより提供されたものを、日本学校心理士会・日本学校心理学会で日本の実状に合わせて、翻訳・翻案
10	新型コロナウィルスについての子どもの心のケアについて	https://www.ajcp.info/heart311/wp-content/uploads/2020/03/h_4.pdf ニューヨーク日本人教育審議会教育相談室 教育相談員 バーンズ静子 森真佐子	2020.3	・子どもと保護者	一般的な子どものストレス反応の説明と新型コロナウィルスパンデミック下において、家庭でできることを記載
11	教職員用：新型コロナウイルス感染症に伴う、再登校、分散登校時の対応について	https://www.ajcp.info/heart311/wp-content/uploads/2020/03/k_2_page.pdf 北海道臨床心理士会	2020.3	・教育関係者（子ども用）	再登校、分散登校時の対応について対応のポイントを説明
12	COVID-19心のサポートコロナ・ウイルス心とからだのサポート授業案＆ワークシート（小学1年～3年）	http://traumaticstress.cocolog-nifty.com/ver02/2020/03/post-252aa9.html Covid-19子どものサポートチームA（代表：秋冨慎司・冨永良喜	2020. 3 .27	・教育関係者（子ども用）	コロナウイルス心とからだのサポート授業案小学1年用、小学2年・3年用を作成
13	COVID-19心のサポートコロナ・ウイルス心とからだのサポート授業案＆ワークシート（小学3年～高校生）	http://traumaticstress.cocolog-nifty.com/ver02/2020/03/post-56c2d5.html Covid-19子どものサポートチームA（代表：秋冨慎司・冨永良喜	2020.3.22	・教育関係者（子ども用）	授業の構成 1）コロナウィルスについて 2）ストレスについて・ストレスチェック 3）藤田医科大学感染症科監修「コロナってなに」を学ぶ 4）以下の項目について1週間のチェック 手洗い、せきエチケット、朝食、勉強、リラックス法、相談・眠りのためのリラックス、落ち着くためのリラックス 5）ふりかえり
14	保育園における新型コロナウイルス感染症に関する手引き	file:///C:/Users/shima/Downloads/2003_covid19_1.pdf 日本小児感染症学会	2020.3.25	・教育保育関係者	保育園における新型コロナウィルスの対応について以下の説明を記載 1）事前準備 2）感染者、濃厚接触者の発生時について 3）保育園での健康チェック 4）保育園での環境整備　　等

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
15	感染症対策下における子どもの安心・安全を高めるために	http://www.jsccp.jp/userfiles/news/general/file/20200302174321_1583138601335720.pdf 日本臨床心理士会	2020.3.2	・子どもと関わる全ての人に	新型コロナウィルスパンデミック下におけるこどものストレスと子どもが安心して、安全な環境作りについて説明
16	ステイホームを心を満たす行動に変えるための資料	file:///C:/Users/shima/Downloads/Behaving%20with%20values%20(1).pdf 鳥取大学医学部竹田研究室	2020.5.15	・子どもと関わる全ての人に	ステイホーム等の感染防止行動を、ストレスではなく心を満たす行動に変えるための工夫について紹介
17	新型コロナウィルス感染症と学童保育所の生活 ～心の健康とケア～	https://www.8-shakyo.or.jp/admin/wp-content/uploads/2020/06/shingatakoronauirusukansenshoutogakudouhoikujonoseikatusouhu.pdf 八王子市社会福祉協議会学童保育課 監修	2020.8.30	・学童保育関係者と子ども	学童保育所職員の方向けに、COVID-19対応における子どもと大人のメンタルヘルスのポイントを解説
18	新型コロナウィルス感染症と保育園の生活（幼児用） ～心の健康とケア～	https://shinsei-kai.org/wp01/wp-content/uploads/2020/08/%E2%98%86%E5%B9%BC%E5%85%90%E7%94%A8%E3%83%91%E3%83%B3%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%88-2.pdf 白百合心理・社会福祉研究所	2020.8.4	・保育園関係者・幼児	より良い保育を目指し、コロナ禍における子どもたちの心をキャッチするためのヒントを掲載
19	新型コロナウィルス感染症と保育園の生活（乳児用） ～心の健康とケア～	https://shinsei-kai.org/wp01/wp-content/uploads/2020/07/%E4%B9%B3%E5%85%90%E7%94%A8-%E3%83%91%E3%83%B3%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%83%E3%83%88.pdf 白百合心理・社会福祉研究所	2020.7.7	・保育園関係者・乳児	上記　乳児用
20	COVID-19地域の子育て支援に生かす親と子の心のケア	https://shinsei-kai.org/wp01/wp-content/uploads/2020/06/COVID-19%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%81%AE%E5%AD%90%E8%82%B2%E3%81%A6%E6%94%AF%E6%8F%B4%E3%81%AB%E7%94%9F%E3%81%8B%E3%81%99%E8%A6%AA%E3%81%A8%E5%AD%90%E3%81%AE%E5%BF%83%E3%81%AE%E3%82%B1%E3%82%A2-4.pdf 白百合心理・社会福祉研究所	2020.6.10	・子育て支援関係者 ・子育て中の家族	地域の子育て(親子）ひろばで出会う親子の心のケアのポイントを記載
21	新型コロナウィルス感染症に際して家族のどう対処するか　親や介護者のためのガイド	https://www.nctsn.org/resources/parent-caregiver-guide-to-helping-families-cope-with-the-coronavirus-disease-2019 The National Child Traumatic Stress Network, 2020	202０.１ 2021.１更新	・保護者 ・介護者	感染症の発生が家族にどのように影響を与える可能性があるか、家族が対処するのを助けるために何ができるかについてのポイントを記載
22	お子さんとコロナウイルスについて話しましょう	https://psych.or.jp/special/covid19/talking+to+children/ 日本心理学会	2020.6.8	・保護者 ・子ども	子ども達が直接保護者から確認し安心するために、子どもと話す時のポイントを記載 英国心理学会公式Webサイトに掲載された記事を英国心理学会の許諾をもと日本語に翻訳
23	妊婦のみなさま、小さなお子さまがいらっしゃるみなさまへ	https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_11087.html 厚生労働省	2020.4.24	・妊婦 ・乳幼児のいる家庭	妊婦や乳幼児がいる家庭の不安を少しでも解消するため、日本産科婦人科学会等の専門家からのビデオメッセージを配信

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
24	保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック	https://www.hoiku-kango.jp/wp-content/uploads/2021/06/%E7%AC%AC3%E7%89%88%E4%BF%9D%E8%82%B2%E7%8F%BE%E5%A0%B4%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E6%96%B0%E5%9E%8B%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E3%82%A6%E3%82%A4%E3%83%AB%E3%82%B9%E6%84%9F%E6%9F%93%E7%97%87%E5%AF%BE%E5%BF%9C%E3%82%AC%E3%82%A4%E3%83%89%E3%83%96%E3%83%83%E3%82%AF.pdf 一般社団法人 全国保育園保健師　看護師連絡会 学術委員会	2021.3 第3版	・保育現場関係者	長引くコロナ禍の中で保育現場の職員の負担が軽減できるよう、安心で安全な環境を整えるために現場でできる以下の感染症対策を記載。 1）職員・園児の健康観察 2）人と人の距離を保つ対策 3）保育所での各生活・活動での留意点 4）環境衛生 5）体調不良児の対応 6）子どもへのケアと職員のメンタルヘルス支援　等
25	新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン	https://www.mext.go.jp/content/20210219-mxt_syoto01-000007775.pdf 文部科学省	2021.2.19 更新	・学校関係者	持続的に児童生徒等の教育を受ける権利を保障していくため，学校における感染およびその拡大のリスクを可能な限り低減した上で，学校運営を継続していくための指針
26	学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル ～「学校の新しい生活様式」～	https://www.mext.go.jp/content/20211210-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf 文部科学省	2021. 12.10更新	・学校関係者	本マニュアルについては「持続的な学校運営のためのガイドライン」の考え方に基づき、学校の衛生管理に関するより具体的な事項について学校の参考となるように作成
27	新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について 幼小中高・特別支援学校に関する情報　リンク集	https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00015.html 文部科学省	2022.2.10	・学校関係者	オミクロン株に対応した学校における新型コロナウイルス感染症対策の徹底について等の最新情報が随時多くの情報が掲載されている
28	新型コロナウイルス感染症の予防に関わる指導資料　リンク集	https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/08060506_00001.htm 文部科学省	不明	・学校関係者	「新型コロナウイルス感染症の予防」「改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引（追補版）「感染症の予防～新型コロナウイルス感染症～」等のPDFが記載
29	「いのち」新型コロナウィルスに関する授業実践について	https://nagaoka.ed.jp/2020/05/14/%ef%bc%95%ef%bc%8f14%e3%80%90%e4%b8%ad%e5%ad%a6%e6%a0%a1%ef%bc%91%e5%b9%b4%e7%94%9f%e3%80%91%e3%80%8c%e3%81%84%e3%81%ae%e3%81%a1%e3%80%8d%e6%96%b0%e5%9e%8b%e3%82%b3%e3%83%ad%e3%83%8a%e3%82%a6%e3%82%a4/ 新潟大学付属長岡中学校	2020.5.14	・学校関係者 ・生徒	2020年４月に「いのち」の授業で新型コロナウイルスに関する学習を実施した際の学習内容の系統、１年生の授業案、ワークシートを添付
30	私のヒーローはあなたです、COVID-19の子供のためのストーリーブック	https://interagencystandingcommittee.org/iasc-reference-group-mental-health-and-psychosocial-support-emergency-settings/my-hero-you-storybook-children-covid-19 ISAC	2020.3.30	・保護者 ・介護者 ・教師 ・子供	緊急事態におけるメンタルヘルスと心理社会的支援を目的に作成

表７　医療従事者～全ての人々用

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	新型コロナウイルスの３つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～	http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/news/pdf/211841aef10ec4c3614a0f659d2f1e2037c5268c.pdf 日本赤十字社	2020.3.26	・一般	新型コロナウィルスの影響下にある子どものストレスを解説し、数種類の対処法を具体的に記載している。「病気」「不安・恐れ」「嫌悪・差別・偏見」の３つの感染症の“負のスパイラル”を理解し、断ち切るためのガイドイラストでわかりやすく解説している
2	COVID-19流行によるストレスへの対処	https://extranet.who.int/kobe_centre/sites/default/files/pdf/Coping-with-stress-print-JPN%20ver.pdf WHO	2020.5.28	・一般	ストレスの対処法について、理解しやすい内容とイラストを使用して、以下の項目で説明 １）信頼している人と話すこと ２）健康的な生活習慣 ３）たばこやお酒、薬物に頼らない ４）信頼できる情報を収集 ５）必要以上の情報量の制限 ６）過去にに逆境に会った時のスキルを活用
3	COVID-19アウトブレイク中のメンタルヘルスに関する注意点	https://covid19-jpn.com/mentalhealth-who/ WHO	2020.3.24 2021.３.18更新	・一般 ・医療従事者 ・医療施設のチームリーダーや管理者 ・子どもの保護者 ・高齢者、基礎疾患のある人や介護者 ・孤立している人	COVID-19アウトブレイク時の精神的および心理的ウェルビーイングを支援するために、WHO精神保健部門によるメンタルヘルスに関する考慮事項を記載
4	COVID-19アウトブレイク中のメンタルヘルスと心理社会的影響に関する検討事項暫定ガイダンス	https://extranet.who.int/kobe_centre/sites/default/files/pdf/20200318_JA_Mental_Health.pdf WHO	2020.３.18	・一般 ・医療従事者 ・医療施設のチームリーダーや管理者 ・子どもの保護者 ・高齢者の介護者 ・隔離下の方	COVID-19 アウトブレイク時の精神的および心理的ウェルビーイングを支援するために、メンタルヘルスに関する考慮事項を記載。左記の各対象ごとに記載されている
5	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関するこころのケアについて	https://plaza.umin.ac.jp/~dp2012/covid19.html 筑波大学医学医療系臨床医学域災害・地域精神医学講座	2020.3.6	・一般の方 ・メディアの方および支援者の方	災害時の精神医療に携わる医療チームとして、COVID-19こころのケアに関する以下の項目を説明 １）感染流行時に生じる様々な問題について ２）心と体の健康を保つ生活の送り方 ３）正しい情報収集について ４）パニック、差別、いじめ、風評被害 ５）支援者へのケア
6	もしも「距離を保つ」ことを求められたなら：あなた自身の安全のために	https://psych.or.jp/special/covid19/Keeping_Your_Distance_to_Stay_Safe_jp/ アメリカ心理学会（American Psychological Association: APA）	2020.4.2	・一般	心理学の立場から「他者と距離を取る」必要が生じた時に役立つ考え方を以下の項目で提案。 １）どう対処するか ２）その後に起きること ３）ツールと情報源 ４）日本語のスマホアプリ ５）協力者

表７　医療従事者～全ての人々用

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
7	新型コロナウィルス感染症とメンタルヘルスに対する行動の必要性	https://www.un.org/sites/un2.un.org/files/un_policy_brief-covid_and_mental_health_final.pdf UN	2020.5.13	・労働者 ・罹患者、検疫対象者 ・感染症診療・感染症対策従事者 ・子どもと、その保護その他のハイリスク者への支援者への支援	1）メンタルヘルスにおけるCOVID-19の影響 2）関連する集団 3）推奨するアクション 等が記されている
8	COVID-19 パンデミック後における出勤再開時のストレス管理管理職向けガイド	https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/Japanese_CSTS_FS_Managing_the_Stress_of_Returning_to_Work_after_COVID-6-10-2021.pdf 日本精神神経学会 日本トラウマティック・ストレス学会	2021.7.7	・労働者全般	出勤再開にあたって、職員が職場に戻る際に役立つ以下の課題に対して、管理職向けの簡単な方法を解説 1）日常業務・スケジュールの再設定 2）新たな目標・役割の定義 3）労働安全の確保 4）業務方針・手順に関する職員の不安や疑問への対応
9	バイタルトーク日本版 VitalTalk Japan（動画）	https://www.youtube.com/channel/UCrDOakdq6pkoH-jHHhJmTDQ バイタルトーク日本版 VitalTalk Japan	2020.6.15	・全ての人々	動画の内容 1）新型コロナ感染症にかかった場合の治療について、予め話し合っておく 2）新型コロナウイルス感染症におけるケアのゴールの話し合い 3）人口呼吸器離脱にあたっての会話 4）電話越しに最後の別れを述べる
10	職場における新型コロナウイルス感染症対策のための業種・業態別マニュアル	https://www.sanei.or.jp/?mode=view&cid=444 日本産業衛生学会	2021.4.23	・労働者全般	マニュアルは以下の６つの業種・業態別にPDFで作成 1）オフィス業務 2）製造業 3）建設業 4）接客業務（対面サービス） 5）運輸業（旅客輸送） 6）運送・配送サービス業
11	職域のための新型コロナウイルス感染症対策ガイド	https://www.sanei.or.jp/images/contents/416/COVID-19guide210512koukai0528revised.pdf 日本産業衛生学会	2021.5.12 更新	・労働者全般	職場でクラスター発生を防ぐための感染防止対策ガイド 1）産業保健職の役割 2）職域における対策 3）海外出張者・駐在員への対策 4）事業者の法的対策のポイント 等が記されている
12	社会的距離を保つよう，感じよくお願いする方法	https://psych.or.jp/special/covid19/Lets_Stay_Safe/ 日本心理学会	2020.4.8	・全ての人々	ポジティブ・ポライトネスと直接的な依頼を組み合わせ，依頼内容を最大限に明確化し、相手に与える不快感を最小化すると方法を提案

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
13	新たにテレワーク（在宅勤務）をする人へ，心理学者からのアドバイス	https://psych.or.jp/special/covid19/tele_work 日本心理学会	2020.3.20	・全ての人々	企業が新型コロナウイルス）の蔓延を遅らせようと職場を閉鎖するこの時期，テレワーク等上司と部下の双方がより効果的に仕事できるよう，産業・組織心理学者からのアドバイスを記載。アメリカ心理学会公式Webサイトに掲載された記事 を，アメリカ心理学会の許諾を得て日本語に翻訳
14	新型コロナウイルス感染症と上手に付き合い、健康に暮らすためにCOVID-19セルフケアガイド	https://www.u-hyogo.ac.jp/careken/covid19/ 兵庫県立大学看護学部	2020.9	・全ての人々 ・ホテル療養者	新型コロナウイルスに感染し宿泊施設で療養することになった場合の対応策が記載
15	職場における新型コロナウイルス感染症予防対策を推進するためのポイント	https://www.johas.go.jp/Portals/0/data0/sanpo/pdf/shingatakorona_downlord_1014.pdf 独立行政法事労働者健康安全機構	2020.9	・労働者 ・管理者	産業医や産業保健スタッフの選任義務がない事業所活用できる感染症予防マニュアル
16	いまここケア -おうちで誰でもできるこころのケア	https://imacococare.net/ 東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野	未掲載	・全ての人々	新型コロナウイルス感染拡大防止のために自宅で過ごす方に向けたストレスへの対処や心の健康を保つための情報をお伝えするサイト
17	新型コロナウィルスを塗りたてのペンキに例えてみる	https://www3.nhk.or.jp/news/special/miraiswitch/article/article42/ NHK未来スイッチ	未掲載	・全ての人々	ウィルスをペンキに例えて、子どもに説明するときにも利用できるわかりやすい説明が記載されている
18	新型コロナウイルス用：VITALTALK コミュニケーション・アドバイス	https://www.vitaltalk.org/wp-content/uploads/VitalTalk_COVID_Japanese.pdf VitalTalk日本版グループ	2020.4.15 更新	・全ての人々	VitalTalk（バイタルトーク） という米国発の医療コミュニケーショントレーニングの創始者の一人であるDr. Anthony Back（ワシントン大学）とその他VitalTalk の人々と協力して作成したコミュニケーション･アドバイス
19	新型コロナウイルス感染症流行下におけるメンタルヘルスに関する相談対応参考情報・事例集	https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000769900.pdf 厚生労働省	2021.4	・全ての人々	一般の人を対象とした調査、都道府県・指定都市本庁・精神保健福祉センターを対象とした調査の結果の概要を紹介。また、精神等保健福祉センター等での相談対応時のアドバイス集を掲載

表８　差別・偏見　・スティグマの防止と対応のガイドライン

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
1	新型コロナウイルス感染症 差別・偏見・いじめを生みださないために大人ができること	https://shinsei-kai.org/wp01/wp-content/uploads/2021/10/covid19gakudootonamukepanhu.pdf 八王子市 社会福祉協議会学童保育課 監修	不明	・一般	新型コロナウイルス感染症(covid-19)などに関連した風評被害や、差別、いじめなどを防ぐために、大人の私たちが共有したい態度やふるまい方を記載
2	「新型コロナウイルス感染症に関連して －差別や偏見をなくしましょう－」	https://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken02_00022.html 法務省	2022.2.18	・一般	新型コロナワクチンの接種を受けていない人への差別や偏見に関する啓発コンテンツ（動画・リーフレット・事例）等を掲載
3	新型コロナウイルス感染症に関する差別・偏見の防止に向けて	https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00122.html 文部科学省	2020.8.25	・一般	新型コロナウイルス“差別・偏見をなくそう”プロジェクトの発足と啓発動画、リーフレットの掲載
4	「新型コロナウイルス感染症に関する偏見や差別をなくしましょう」	https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/tadasikureiseini.html 福岡県	2021.2.08	・一般	コロナ差別・ワクチン差別をなくすための資料や啓発動画・パンフレットなどが掲載
5	STOP！コロナ差別 ―差別をなくし正しい理解を	http://www.jinken.or.jp/archives/21491 公益財団法人人権教育啓発推進センター	未記載	・一般	コロナによって人間性を奪われることのない社会づくりと不当な差別や排除の防止を目的に、「STOP！コロナ差別 ― 差別をなくし正しい理解を ― キャンペーン」を展開。動画などのコンテンツを掲載
6	シトラスリボンプロジェクト（ちょびっと１９＋において実施するシトラスリボンプロジェクト）	https://citrus-ribbon.com/ シトラスリボンプロジェクト	未記載	・一般	コロナ禍で生まれた差別、偏見を耳にした愛媛の有志がつくったプロジェクト。 愛媛特産の柑橘にちなみ、シトラス色のリボンや専用ロゴを身につけて、「ただいま」「おかえり」の気持ちを表す活動を広めている。 リボンやロゴで表現する３つの輪は、地域と家庭と職場（もしくは学校）を表している。
7	COVID-19に関する社会的スティグマの防止と対応のガイド	https://www.unicef.or.jp/news/2020/0096.html ユニセフ	2020.4	・一般	政府、メディア、地域の組織などに活用してもらうことを目的として、ユニセフ、世界保健機関（WHO）、および国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）によって作成
8	新型コロナウイルス(COVID-19)に関わる偏見や差別に立ち向かう	https://psych.or.jp/special/covid19/combating_bias_and_stigma/ 日本心理学会	2020.325	・一般	コロナウイルスとともに広がる偏見，差別を止める方法を掲示。アメリカ心理学会公式Webサイトに掲載された記事 "Combating bias and stigma related to COVID-19" を，アメリカ心理学会の許諾を得て日本語に翻訳
9	正しく怖がるためのリンク集	https://fij.info/coronavirus-feature/links FIJ（ファクトチェック・イニシアティブ）は、日本でファクトチェックの普及活動を行う非営利団体	2020.827	・一般	新型コロナウィルスの情報も含め、手軽にファクトチェックを知るために、リーフレット、入門動画、コミックを掲載。新型コロナウィルス特設サイトも開設されている。

	タイトル	発信元・URL	発信日	対象	内容
10	医療従事者とその家族の新型コロナウィルスのスティグマを軽減させるガイドライン	https://www.afro.who.int/sites/default/files/Covid-19/Techinical%20documents/Guidance%20to%20reduce%20COVID-19%20stigma%20on%20Health%20workers%20and%20families.pdf WHO	記載なし	・医療従事者とその家族	医療従事者とその家族に対して、どのようなスティグマが発生するのか、またどのような影響があるのか、対策方法等が記載
11	新型コロナウィルスとスティグマ	https://publichealth.jhu.edu/2021/covid-19-and-stigma the National Johns Hopkins University	2021.1.13	・医療従事者	新型コロナウィルスはなぜ、スティグマを発生させるのか、スティグマがそのようにパンデミックを悪化させるのか等が記載されており、スティグマ軽減の重要性とその対策について記載
12	新型コロナウィルスのスティグマ軽減	https://doh.wa.gov/community-and-environment/health-equity/stigma/covid-19-stigma-reduction Washington State Department of health	未掲載	・一般	新型コロナウィルススティグマ軽減のために以下のポイントが掲載 1）個人としてできること 2）差別を報告すr方法 3）事実を広める方法 4）covid-19のヒーロを紹介 5）専門職としてできること
13	新型コロナウィルスにおけるスティグマと差別への対処：HIVとエイズへの対応の重要な学びから	https://www.ilo.org/wcmsp5/groups/public/---dgreports/---gender/documents/publication/wcms_749182.pd ILO	2020.5	・一般	スティグマと差別は様々な状況や集団で差異もあるが、共通する側面もあり、covid-19のスティグマに対してもHIVとエイズから学ぶ知見を提示
14	COVID-19の関連する偏見やスティグマとの闘い	https://www.apa.org/topics/covid-19/bias American Psychological association	2020.3.25	・一般	スティグマ軽減、特にコロナウィルスとともに広がる外国人排斥を防止する以下の方法が記載 1）個人としてできること 2）事実を広める 3）ソーシャルインフルエンサーを関与させる 4）体験者の声を聴く 5）多様なコミュニティの資料を掲示し、啓発する 6）多様な人々やコミュニティを受け入れる
15	COVID-19に関する社会的スティグマ	https://extranet.who.int/kobe_centre/sites/default/files/20200224_JA_Stigma_IFRC_UNICEF_WHO_revised.pdf WHO	2020. 2 .24	・COVID-19に対応する政府、報道機関、地域の組織	COVID-19に関する社会的スティグマの防止と対応について以下の内容を記載 １）社会的スティグマについて ２）社会的スティグマへの対処と回避に関する３のヒント（言葉を大切に・ それぞれの役割を果たす・コミュニケーションのヒントとメッセージ）

Ⅳ　考察

本稿では、前年度に引き続き現在発信しているCOVID-19のメンタルヘルスに関するマニュアルやガイドラインを抽出し、リストを作成した。対象読者別では、前年度3件のみであった教育・保育関係者・子どもと保護者用を対象としたガイドラインが30件となり、最も多い件数となった。今回追加した27件の中には、2020年3月から発信されているものもあった。当時は発信しているものの、ほとんどリンクされることがなく、オリジナルのサイトでしか確認することができなかったのではないかと思われる。現在は、検索作業の中で、複数のサイトでリンクが張られているものを多く見出すことができた。そのような点では、本当に必要な対象者が直接情報を取得できやすい環境になったと思われる。内容に関しては、細分化され、「オミクロン株対応」等の変異株に対応した資料や「再登校・分散登校時の対応」等学校関係者のニーズに合わせたガイドラインが作成されるようになっている。この特徴は他領域でも同様であり、労働者等を対象としたガイドラインでは、業種・業態別やテレワーク時の対応等のガイドラインが作成されていた。医療関係のガイドラインも同じく、各種学会は「COVID-19 パンデミック下での治療基本指針」等細かい疾患別の専門的なガイドラインが多く作成[8)]していたが、今回は選別の対象としなかった。本年度新たに、追加したスティグマに関するガイドラインは、国内外共に2020年3月頃から発信され、最近では2022年2月に作成された資料もある。差別・偏見・スティグマへの課題は、国内外ともに現在もなお重要な課題と思われる。

今年度作成したリストは、2022年3月までに確認できたガイドラインに限定しているが、対象者がより細分化され、現場に対応した優れたガイドラインやマニュアルが現在も作成されている。また、今回掲載したガイドラインでは、更新または、新たに改訂版を出しているものも複数あった。改訂版には、現場で活用する対象者のニーズに応えた内容で改定されており、今後も状況に合わせ、継続的に更新または改定されていくと考えられる。

研究Ⅱ　　新興感染症パンデミック時のこころのあり方に関する文献レビュー
新型インフルエンザパンデミック期における心理、情報提供のあり方とスティグマ

Ⅰ　はじめに

2009 年 3 月下旬、米国・メキシコ等において、A (H1N1) 以後(新型インフルエンザ)の豚からヒトへの感染例及び、ヒトからヒトへの感染例が確認された。その後同年 5 月に近畿県内で感染者が複数確認されると、感染者が所属する学校に誹謗中傷が殺到したり、罹患した高校生がいじめられたりするなどの差別的な行動がみられた[9]。新型インフルエンザ等の新興感染症は、①新しい、不明な点が多い疾患　②私たちは、しばしば未知のものを恐れる。③恐怖を「他者」と関連づけるのは容易、の 3 点からスティグマを引き起こしやすいと指摘されている[7)]。現在なおパンデミック期である COVID-19 の関しても同様であり、感染者及びその家族、医療従事者とその家族までに差別被害が及んでおり[10)11)].感染者とその関係者に係るスティグマを防止することが重要な課題である。新型インフルエンザと COVID-19 では異なる疾患であり、発生時期や拡大期間、経過も違いがあるが、同じ新興感染症として共通するところも多くある。新型インフルエンザパンデミック期における人々の心理やリスクコミュニケーションのあり方を文献検討することは、COVID-19 及び新たな感染症に対応する資料を得ることができる。

以上のことより、本研究は 2009 年にパンデミックを起こした新型インフルエンザを対象に、パンデミック期の人々の心理や情報提供のあり方やリスクコミュニケーションに焦点をあて、先行研究をレビューし、COVID-19 のスティグマィグマ軽減に役立つ知見を集積することを目的とした。

Ⅱ　研究方法

本研究は，妥当性のある研究論文を選択するため，システマティックレビューおよびメタアナリシスのガイドラインである PRISMA 声明の原則に準拠し、実施した[12)]。

1．文献検索過程

学術情報データベースである CiNii、J-STAGE、医中誌 WEB、IRDB を用いてデータとなる既存文献を検索した。検索の用語においては、「新型インフルエンザ」「差別」「偏見」「心のケア」「心理」「スティグマ」の組み合わせを使用して、検索を行った。

２．選考基準と除外基準

検索された文献は、以下の選択基準に基づき、タイトルと抄録のみで選別した。その後、フルペーパーが入手可能である文献を精読し、適格性を判断した。

１）選考基準

・国内で実施された研究論文（英語論文含む）
・対象疾患が「新型インフルエンザ」であること
・差別や偏見、心理や心のケアの内容が具体的に記載されているものであること

２）除外基準

・非公開研究

・心のケアや心理に関係のない文献

・文献レビュー

3．文献の選択

第 1 段階では、データベースから抽出した文献 221 本と，文献参照リストとその他の情報源から追加した 6 本を加え，227 本を特定した。第 2 段階では、全てのタイトル・抄録を閲覧し、本研究のリサーチクエスチョンに合致しない文献、重複文献 196 本を除外し、31 本を選択した。さらに、対象疾患が新型インフルエンザではない文献、「差別・偏見」「心のケア」や「心理」に関する内容が記されていない文献 8 本を除外した。第 3 段階では，適格性を有する候補文献 23 本を精読、除外基準に相当する文献 12 本を除外し、最終的に 11 本を採択する文献として決定した。（図１）

４．倫理的配慮

本研究は文献研究のため該当しない。

５．　分析方法

レビューシートを作成し、①著者名・掲載年　②キーワード　③対象　④研究デザイン・研究方法　⑤研究目的　⑥研究期間　⑦考察／結果　の項目立てをして、内容を整理した。（表１）

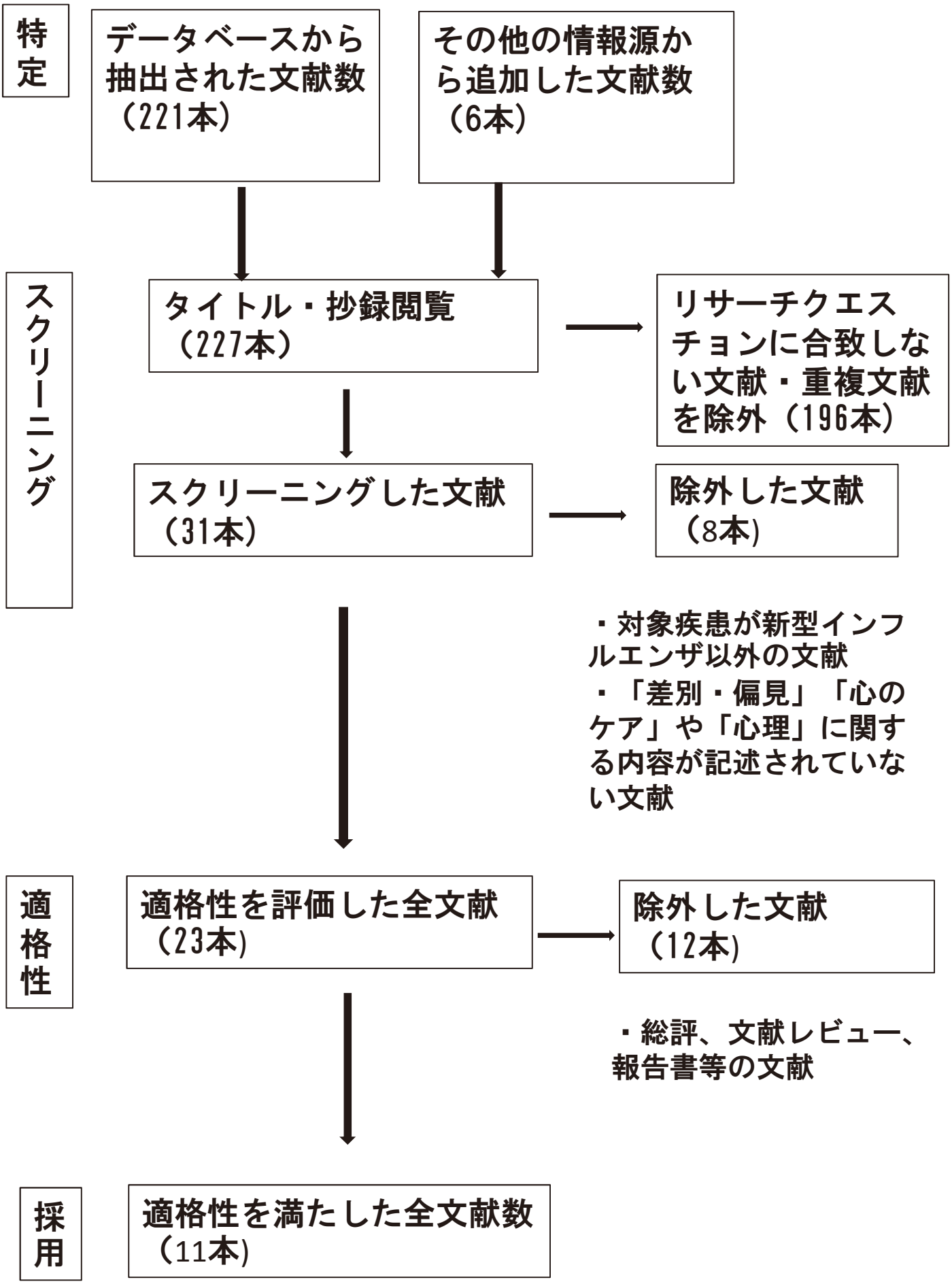

図１　対象文献選定のフローチャート

表１　各研究の概要

著者 年	キーワード	対象	研究方法 使用尺度	研究目的	研究年度 期間	結果/考察
勝見吉彰 2011年3月	社会考慮 新型インフルエンザに対する態度 リスク認知 感染予防行動	女子大学生275名を対象者として，5種類の質問紙からなる調査を実施した。	質問紙調査 社会的考慮尺度 新型インフルエンザに対する認知・態度尺度 新型インフルエンザによる影響の予測尺度 他人の行為に対する不快感の程度尺度	社会考慮を個人の感染予防行動方向づける一つの要因と考え、新型インフルエンザに対するリスク認知と自他の感染予防行動への態度と社会考慮との関連について検討することを目的とした。	2010 年 7 月下旬に大学の講義時間内に質問紙を配布し回答させる形で行われた。	社会考慮が高い者は新型インフルエンザの流行に対して，社会考慮が低い者よりも強い懸念を抱いていた。社会考慮が高い者は低い者に比べて新型インフルエンザに関する情報を得ようとする傾向があった。社会考慮の高い者は低い者に比べて感染予防行動をより熱心に行なっていた。社会考慮の高い者は感染予防に熱心でない者に対してより不快感を抱きやすかった。これらの結果から，社会考慮を高めることが感染症の流行抑制に役立つ可能性が示唆された。
海後宗男 禁新 松枝世 内山祭 金鈴珍 ジエニファ-.エヴア 楊素菌 2011年3月	リスク認知 新型インフルエンザ メディア報道 不安 情報 知識	茨城県国立T大学学生 第1期150名 （男86名　女64名） 第2期148名 （男86名　女62名）	独自の質問紙による調査	新型インフルエンザに感梁する危険性があり、メディア接触騒が多いと考えられる日本の大学生を対象にメディア報道が増大している 2009年5月期と、より感染リスクが高まっている 2009年9月期において、新型インフルエンザに関する人々の知識や行動、意識の変化を検討。	第1期2009年5月25日～5月26日 第2期2009年9月7日～8日	大学生が情報を最も多く得ているメディアはテレビであり、能動的な情報入手が行われていない傾向があった。2009年9月の不安感や重要度は、2009年5月と比べて高くなっていた。この時期は、感染が拡大していたが、メディアの情報量が減少傾向にあった。感染リスクの高まりと知識の不足から生じた不安感と重要度が上昇したと考察。2009年9月の不安感は公的な対策への不安感、個人の情報入手の限界に対する無力感と考察。新型インフルエンザに関するメディア報道の影響の重要性を示唆。
田代 隆良 諫山 有葵奈 川原 享子 2011年8月	新型インフルエンザ マスク 手洗い 自宅隔離 感染予防行動	全学部の３年次学生721人（流行時２年生	質問紙調査	長崎大学における新型インフルエンザの流行状況，感染対策，情報伝達，学生の行動等について検証した。	2010年６月	インフルエンザ様症状のあったもの226人（31.3%），新型インフルエンザと診断されたもの164人（22.7%），診断結果を大学に報告したもの120人（16.6%）だった．新型インフルエンザ罹患率はマスク着用率の低い学部で高かった．学生は新型インフルエンザと感染防御に関する情報を主に友人から得ており，掲示板やホームページからは少なかった．大学は全学生に確実に情報を提供すべきであり，学生は適切な感染防御対策を実行すべきと考察。

表１　各研究の概要

著者 年	キーワード	対象	研究方法 使用尺度	研究目的	研究年度 期間	結果/考察
田辺則子 高橋敏子 田原卓浩 2010年	記載なし 新型インフルエンザ リスクコミュニケーション 電話相談 不安	2009年4月～2010年3月に寄せられた全相談140，939件のうち，対象年齢0～15歳までの相談　27，343件から，インフルエンザ関連相談8，868件を抽出し，相談内容により『情報が欲しい』『発熱未受診』・『発熱治中』・『ホームケア』の4分類に分け，検証	電話相談の内容分析調査	インフルエンザ・パンデミック期における子育て中の保護者の相談内容を分析することにより，流行の経過とともに変化する支援のニーズを明らかにする。今後の新たな感染症の流行に際しての危機管理に必要とされる，より適切な情報の発信機能と，それを基盤とした電話相談の課題を明らかにする。	2009年4月～2010年3月	2009年5月以降、相談件数が増加したのは、メディアや風説により未知の病気である新型インフルエンザに関する情報が氾濫したことによるものと考察。厚生労働省や国立感染症情報センターが発表する情報を収集し、正確でわかりやすい表現となるように工夫して速やかに発信することが電話相談の指名の１つであることを示した。
大見広規, 舟根妃都美, 結城佳子, 播本雅津子 寺山和幸 2010年	新型インフルエンザ対策，意識調査，市民，学生，インターネット調査 不安	住民台帳から無作為に選んだ3000 名の名寄市民と，講演会に参加した大学生54 名	質問紙調査	新型インフルエンザに関する地域における公衆衛生行政等の危機管理対策のあり方を検討するために、市民や学生の意識を調査する	パンデミックとなることが予想されていなかった時期の2008 年6 月に実施	インターネット調査結果と比較すると，市民は一般的な感染症予防対策を明確に行っており，また警戒感も強かった．一方，学生はきわめて無防備である上，新型インフルエンザに対する警戒感も薄かった．いずれも国・自治体の行動計画の認知度は低いという結果になった。
及川晴 及川昌典 2010年	optimistic bias, emotion, swine flu. 楽観性バイアス 感情 新型インフルエンザ 不安	都内大学生112名。この内，全ての調査に回答した79 名（女性40 名，男性39 名，平均年齢19.30 歳，SD＝1.22）を分析対象とした。	質問紙調査	4期にお行ける新型インフルエンザに関する知識量と不安感情・予防行動・楽観性バイアスについて検討する。	第一調査 2009 年4 月29 日 第二調査 5 月29 日 第三調査 6 月24 日 第四調査 7 月29 日	感染リスクと必要な対処に関する情報は、初期から継続的に報道されていた。感染リスクに関する情報が浸透しても、不安感情は低下していった。明らかなリスクが事前に知らされていても、関連する情報が繰り返し提示されると感情の飽和や楽観的な割引が生じ、予防行動が差し控えられることが示唆された。
碓井真史 2009年	新型インフルエンザ リスク関連行動　プロトタイプ・イメージ （楽観主義） 不安の用語	新潟県内の短期大学生1年女子163名。解答に不備のあった11名を除き、152名を分析対象	質問紙 楽観主義尺度	「パンデミック」といった一般にとっては新語となる用語に対する不安感、ならびにプロトタイプへのイメージが新型インフルエンザ感染予防行動にどのような影響を与えるかを検討する。リスク認知とリスクを回避するための感染予防行動に及ぼす個人の特性面を調べるために楽観傾向と悲観傾向を測定する	2009年5月18日	用語に対する不安については、「パンミック」という言葉は、「世界的流行」「感染爆発」よりも不安を引き起こさなかった。感染拡大期に、全く感染予防行動をとっていないプロトタイプに対して否定的なメージを持つ人ほど、感染予防行動を取ろうとする傾向がみられた。

表１　各研究の概要

著者 年	キーワード	対象	研究方法 使用尺度	研究目的	研究年度 期間	結果/考察
勝田吉彰 2008年	記載なし 新型インフルエンザ 社会不安 報道 スティグマ	全国紙（朝日・産経・毎日・読売，，地元紙（神戸・山陽，通信社（共同通信）記者に対しアンケート調査を実施。総数143に対し有効回答数135	質問紙調査	記者の意識調査を行い，マスメディアに対しどのような働きかけや提言を行うべきか検討する。	不明	「感染者発生」には高い関心が示されたが，社会不安を拡大する「噂の流布」に対する関心は低く，流行時には社会に流布する噂の拾い上げと訂正報道を強く要請する必要があると考えられた.
啜素代 佐久間春夫 2009年	新型インフルエンザ 高校生　部活動 心理 不安	大阪府内の1高校身近な高校生が新型インフルエンザに感染し、完全学校閉鎖を経験した高校生　1～3年生638名（男子207　女子431）	10代の易感染性に対する意識、感染原因の認知、学校閉鎖に対する意識についての自記式質問紙調査	10代の易感染性に対する意識、感染原因への認知、学校閉鎖に対する意識についての実態調査を行い、新型インフルエンザ感染拡大が高校生の心理面に与えた影響について検討する。	2009年5月の学校閉鎖直後	易感染性に対する意識では、「自分もきをつけようと思った」と回答した者が8割と多かったが、3年生男子では他の学年・性別に比べて「自分が感染しないだろうと思った」と回答した者が多かった。学校閉鎖に関して他の学年・性別に比べて、3年男子では「部活がしたい」と回答したものが多かった。部活動を行っていた3年生は他の学年と比べて、心理的影響を受けていた可能性が示唆された。
川添文子 高宮静男 磯部昌憲 今井必生 松石邦隆 2010年	大規模感染症 pandemic 新型インフルエンザ ストレス	所属病院職員1235 名に無記名の自己記入式アンケート調査用紙を配布し，660 名の回答を得た（回収率53 ％）．そのうち調査結果公表に同意を得られ，同答に不備がなかった569 名を対象とした.	新型インフルエンザ対応に伴うストレス要因や症状に関する項目とIES（Impact　of Event Scale)を使用した質問紙調査	flu対応の厳戒態勢が緩和された後に，fiuに伴う職員のストレスを調査し、大規模感染症対応が医療従事者に与える心理的影響と，今後取り組むべき課題について検討。	2009年7月15日～24日	医師群は，flu 病棟の勤務がより心に衝撃を与え，発熱外来の勤務によって，flu 対応のストレスが感じられやすいと考えられた また看護職群では，flu病棟，発熱外来，いずれの勤務も心に衝撃とストレスを与えやすいと示唆された．IES の臨床評価では，いずれの得点も9 点未満で，臨床的に問題ない範囲ではあった。しかし弱毒性であっても，直接患者に接する機会の多い医療従事者に，より心に衝撃やストレスを与えやすいと考察。
三島和子 2010年	pandemic flu, H1N1 flu, H5N1 risk communication risk cognition 不安 ストレス	サーベイリサーチセンターの登録 モニター（全国から抽出）有効回答者数 1016名	インターネットアンケート調査 使用尺度 新型インフルエンザのリスク認知尺度 ①「恐ろしさ」尺度 ②「未知性」尺度	新型インフルエンザに関する人々のリスク認知の実情とより効果的なリスクコミュニケーションのあり方について実証的検証を行う。	2008年11月7日～21日	新型インフルエンザとパンデミックの認知度は,世代が上がるほど新型インフルエンザの認知度が高くなることが分かった。新型インフルエンザの理解度については、おおむね新型インフルエンザの脅威について理解を示す一方で「若い人ほど重症化しやすい」という新型インフルエンザ特有の傾向についての理解度は非常に低かった。若い世代の新型インフルエンザに対するリスク認知が高く，高齢者世代で低かったが事前対策への意欲は若い世代で低く高齢者世代で高くなった。

表２　新型インフルエンザパンデミック期の動向と各研究の実施期間

西暦	海外	日本	研究期間
2008年			大見等2008年6月 三島2008年11月7日～21日
2009年　4月23日	メキシコで新型インフルエンザ患者を確認		2009年4月田辺等（2010年3月まで）
4月24日	WHO 国際保健規約に基づき国際緊急事態を宣言	厚生労働省から都道府県への情報提供	
4月25日		検疫強化・コールセンター設置	
4月27日	WHOフェーズ４宣言（コミュニティレベルの大発生の要因となるヒト-ヒト伝染）	政府の新型インフルエンザ対策本部で「基本的対処方針」が策定	及川等（2009年4月29日）
4月29日	WHOフェーズ5宣言（ヒト-ヒト伝染が複数国で広まる）		
5月8日		検疫における最初の患者確認（成田空港）	
5月16日		大阪・兵庫で国内最初の発生 その後、高校生を中心とした集団感染に拡大）	
5月18日～24日		厚生労働省は、大阪府や兵庫県に全中学、高校の臨時休校を要請。大阪府内では公立の全中高で、兵庫県内では公立の全小中高で、臨時休校措置がとられた大阪・兵庫全域の学校閉鎖	及川等（2009年5月29日） 碓井等（2009年5月18日）

国内発生期

	西暦	海外	日本	研究期間
国内発生期				海後等（2009年5月25日・26日） 曙等　（2009年5月）
	6月11日	WHOフェーズ6（地球規模の流行）パンデミックを宣言		
感染拡大期				川添等（7月15日～24日） 及川等（7月29日）
	8月15日		初めての死者確認（沖縄）	
蔓延期				
	2010年			海後等（2009年9月7日・8日）
	6月10日	WHO「最も深刻な時期は脱し と表明		田代等2010年6月
回復期				勝見（2010年7月）
	8月10日	WHOフェーズ6からポスト・パンデミックへ引き下げ、世界的大流行の終結を宣言。		

引用　内閣官房新型インフルエンザ等対策室　https://www.cas.go.jp/jp/influenza/index.html

Ⅲ　結果

１　研究の動向

１）文献の掲載年次と研究期間について

今回採用された新型インフルエンザに関する文献について、2008年が1件、2009年2件、2010 年 5 件、2011 年 3 件であった。また、研究を実施した時期が、パンデミック期以前、国内発生期、感染拡大期、まん延期、回復期の各期の状況によって、結果が影響されると考え、各研究の実施期間を表２に示した。

２）対象者の属性と研究デザイン

対象者の属性は、一般の大学生（他の対象者もある研究を含む）６件、子育て中（子どもの年齢 0 歳～15 歳）の保護者 1 件、一般市民 2 件（大学生含む)、全国紙の記者 1 件、高校生 1 件、医療関係者１件であった。研究デザインでは、11 件全て量的研究であり、質問紙調査が 10 件、電話相談の内容を分析した調査が 1 件であった。質問紙調査で、使用された既存の尺度は、社会的考慮尺度、楽観主義尺度、IES（(Impact of Event Scale)）等であった。また、従来の尺度を新型インフルエンザ対応の尺度として新たに開発されたものとして、新型インフルエンザに対する認知・態度尺度、他人の行為に対する不快感の程度尺度、新型インフルエンザによる影響の予測尺度、新型インフルエンザのリスク認知尺度などがあった。

２　新型インフルエンザ流行に対する不安やストレスについて

新型インフルエンザの不安感やストレスに関して、大学生を対象とした研究が 4 本、高校生 1 本、子どもの保護者 1 本、医療関係者 1 本が報告されていた。大学生を対象とした研究の中で海後[13]等は、同じ調査協力者を対象に調査を 2 回実施し（2009 年の 5 月期と同年 9 月期)、調査データを分析、比較している。中でも「新型インフルエンザについての不安や恐ろしさを感じていますか？」という質問項目に対して、不安を「ある程度感じる」及び「非常に感じる」と答えた人の割合は 5 月では 38.7%、9 月には 46.6%と増加していた。対して不安を「全く感じない」と答えた人の割合は、5 月期には 46.7%、9 月には 37.2%と減少したと報告している。さらに 5 月の平均値と 9 月の平均値を比較する t 検定を行ったところ、2 つの時期において新型インフルエンザに対する不安に有意差があることが認められた。また「世界的に新型インフルエンザの問題は重要だと思うか」という質問項目に対して、5 月には「ある程度思う」「非常にそう思う」と回答した割合が 74%、9 月は 77.7%と、いずれの時期においても重要視されている結果となった。一方で「全く思わない」及び「あまり思わない」と答えた人の割合はそれぞれ、14%、9.5%であった。この項目に関する t 検定の結果では有意差は確認されなかった。海後等はこれらの結果について、5 月期よりも 9 月のほうが実際の感染リスクが高まっていたため、不安感や重要度が高くなったと考察している。

次に及川[14]らも学生を対象に 2009 年 4 月～7 月の４期において、新型インフルエンザに

関する認知、不安感情・予防行動・楽観性バイアスについて検討している。不安感情については、第 1 期より下がり続け、学内で感染者が確認された 3 期においても低下を示していた。この結果について、及川等は、新型インフルエンザに関する情報が浸透していくことで、感情反応が飽和し、感染に対する不安感情が低下したのではないかと考察している。

また、碓井[15]は、世界的流行を意味する 3 種類の用語「パンデミック」「世界的流行」「感染爆発」に対する不安感の評定の検討を学生に対して実施している。不安感の評定（7 段階）の平均値はいずれも高く、不安を感じるという回答が得られた。さらに 3 群間の差を調べるための分散分析を行った結果「世界的流行」と「感染爆発」間、「パンデミック」と他の 2 群間で有意差が見られ。「パンデミック」に対する不安のほうが他の用語に対する不安より低かった。

大見等[16]の研究では、大学生と一般市民を対象に新型インフルエンザに対する不安感や予防行動についての調査を実施している。この研究は、新型インフルエンザパンデミック期前の 2018 年に行った調査である。調査の結果、学生は一般市民と比較して、不安感や危機感が薄く、新型インフルエンザパンデミック時の交通機関・集客施設利用等の行動は自粛しないとの回答が示された。大見らは感染リスクの高い学生に対して、若者層の行動様式にあった危機情報を伝える体制が必要と述べている。

畷等[17]の研究では、実際に身近な高校生が新型インフルエンザに感染し、7 日間の完全学校閉鎖を経験した高校生 638 名を対象に、易感染性に対する意識、感染原因への認知、学校閉鎖に対する意識について実態調査を行っている。その結果、易感染性については、「自分も気を付けようと思った」と回答した者が 8 割を占め、「自分は感染しないだろうと思った」と回答した者は 1 割程度であった。しかし、自由記述では「気にならなかった」「特に何も思わなかった」「関係ないと思った」という内容が 8 割を占めていた。学校閉鎖に対する意識では、「自由に外に出たい」と回答した者が一番多く（30.9%）、次に「授業を受けたい」6.7%となった。その他の自由記述では、「何も思わない」という内容が 7 割で、「ラッキー」「うれしい」等の肯定的な内容が 2 割、「家にいるのはストレス」等の否定的な内容は 1 割程度であった。学年別、性別比較で 3 年生男子においては、「部活をしたい」と回答した者が 3 割を占めていた。畷等の考察では、学校閉鎖の時期が 5 月半ばであり、他の学年とは違い、3 年生にとっては部活動の引退時期が近づいているという意識が影響したものと記している。

新型インフルエンザ流行期における子育て中の保護者の相談内容を分析した田辺等[18]の研究では、新型インフルエンザの流行状況に合わせて 2009 年 4 月～2010 年 3 月までの相談内容分析している。相談件数の推移はインフルエンザの流行状況と相関し、国内で初めて新型インフルエンザ患者が報告された 5 月以降相談件数が増え始め、11 月にピークに達し、その後 2010 年 2 月以降は減少したと報告している。相談内容では「どのような疾患なのか、注意することはなにか」等の疾病に対する不安と情報ニーズや「公園であそんでもよいのか」などの感染予防に関する相談があった。年齢層の特性としては、0～4 歳児の子どもについ

ての相談が多く、症状や治療に関する相談が主体で、保護者が語る口調から不安感が極度に募る様子を感じたと記している。相談内容も流行の推移により変化しており、2009 年 5 月以降は、メディアや風説による情報が氾濫し、翻弄されている相談内容が多く、8 月頃の中間期は、未感染の受診方法、検査の時期、周りでの流行・感染の可能性の有無等の内容が多く占めていた。2009 年１１月あたり後期になると、感染後に関する相談が多くよせられたと報告している。

医療関係者を対象とした川添等 [19] の報告では、医師、看護職、その他の職員で新型インフルエンザ対応病病棟、発熱外来に勤務経験がある者とない者について、IES（Impact of Event Scale）の合計得点、ストレス項目の合計得点の差をMann-Whitney UTestを用いて検定している。その結果、医師看護師共にインフルエンザ対応病棟や発熱外来に「勤務経験がある者のほうがIES得点、ストレス得点共に高い数値となった。川添等は、IESの臨床評価がいずれも9点未満であったことから、臨床的に問題のない範囲であるが、弱毒性の感染症であっても、直接患者に接する機会の多い医療従事者に心の衝撃やストレスをかかえやすいと考察している。

３　新型インフルエンザに関する情報提供のあり方とスティグマについて

１）感染症予防としての情報提供について

田代 [20] 等は、長崎大学内における新型インフルエンザの流行状況、感染対策、情報伝達、学生の行動について、検証している。長崎大学では、長崎県で新型インフルエンザ感染者発生を契機に、学生用掲示板にて「重要なお知らせ」として各学部掲示板並びに大学ホームページに発生状況等の情報を発信するため毎日確認するように注意喚起をした。また、実際に学内で感染者が発生した時点で、疑わしい症状が出た場合の対応や手洗い、うがい、マスク着用等の予防行動の実施を啓発している。しかしながら、掲示板やホームページから新型インフルエンザと感染防御に関する情報を得た学生は少なく、友人を介しての情報提供が多かったと報告している。田代等は、掲示板やホームページを確認するのは、学生の責任であるが、より注意喚起できる情報発信の方法を工夫すべきと考察している。

同じく大学生を対象に 4 期において調査した及川等 [14] の研究報告によれば。最終期である時点４において、他の時点に比べて予防行動が低いという結果になった。及川等は、情報の増加や事態の悪化に関わらず、予防行動は高まらないという予測を支持する結果であったと報告している。また、関連報道が何週間も繰り返されることで感情飽和が生じ、深刻な感染拡大状況においても、大学生の感染予防行動が低くなったと考察している。今後の課題として、どのような行動様式が予防行動の促進、または抑制につながるのかを明らかにすることが重要と述べている。

0 歳から 15 歳までの子どもをもつ保護者からの電話相談の内容を分析した田辺 [18] 等の報告では、2009 年 5 月以降、電話相談が急増しており、その背景には。メディアや風説により、情報が氾濫した可能性があることを考察している。また、流行の推移による電話相談

の件数や内容に変化があり、個々の状況に合わせた情報提供のあり方やニーズに対応できるシステム構築が課題であると述べている。

２）情報提供とリスク認知

三島[21]は、インターネットアンケートにより、全国から抽出された10代～70代以上の男女を対象にリスク認知の実情とリスクコミュニケーションのあり方についての研究を報告している。その結果、新型インフルエンザに関する情報提供について「質・量が不足している」と考える人が8割以上となっていた。また、新型インフルエンザとパンデミックの認知度について、10～20代は極めて低く、世代があがるほど認知度が高くなることが示された。さらに認知度を子どもの有無別に χ 二乗検定を行ったところ、1%水準で有意の結果となり、子どもをもつ人ほど、新型インフルエンザの認知度は高くなるという結果になった。リスク認知においては、高齢者よりも若者のほうが高いという結果になっている。しかしながら、実際の事前対策の意欲については、高齢者のほうが高く、若い世代は低くなるというねじれの関係が見出されている。次に新型インフルエンザの理解度については、おおむね理解を示す一方で、「予防接種で予防可」「かかりつけの内科医で治療」等と考える人が4割となっていた。また「若い人ほど重症化しやすい」という情報についての理解度が非常に低かったと報告している。三島はこれらの結果を踏まえて今後のリスクコミュニケーションのあり方として、重要事項に関するリスクコミュニケーションには「継続」「繰り返し」が必要であり、年齢層に合わせた行動指針の整理と普及併発ツールの作成・浸透を図ることが重要であると述べている。

３）リスクコミュニケーションのありかたとスティグマ

学生を対象とした勝見[22]の研究では、社会考慮に焦点をあて、新型インフルエンザに対するリスク認知と感染予防態度の関連について報告している。社会考慮とは、社会的迷惑を検討するための概念の１つとされ、個人の生活空間を『社会』として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度のことである。また、社会考慮が高いということは、社会に対して深い関心があることとされている[23]。　勝見は、社会考慮の高低と新型インフルエンザに対する認知・態度に関して、社会考慮の高い人のほうが新型インフルエンザの流行をより深刻に受け止め、情報を積極的に収集しようとしたと報告している。しかし、マスメディアによる過剰な報道に触れ、社会考慮の高い人は不安感を喚起される側面があった可能性についても示している。また、社会考慮と感染予防行動については、社会行動の高い者ほど、感染予防行動をより熱心に行おうとする傾向があることを確認している。勝見は、「個人が社会考慮を高め、予防的対処を行うと結果的に社会全体のリスクを低減する」ことが適切に伝わるリスクコミュニケーションのあり方が重要と述べている。

学生を対象とした碓井[15]の研究では、リスクを認知し、実際にリスク回避行動の意思決

定に関わるプロトタイプ理論を用いていて、リスク関連行動を検討している。リスク回避行動をとっていない典型的な人物プロトタイプとして、その人物へのイメージが新型インフルエンザ感染予防行動に「どのような影響を与えるかを報告している。碓井は、感染拡大期においても、全く感染予防行動をとっていないプロトタイプに対して、否定的なイメージをもつ人ほど、感染予防行動を取ろうとする傾向がみられたと報告している。さらに、リスク回避行動に最も影響を与えていたのは、不安感情ではなく、プロトタイプイメージとしている。碓井は適切なリスク回避行動を促進するために、同調行動等社会心理学的な研究が必要と述べている。

マスコミの情報提供の在り方とスティグマについて、勝田[24]の全国紙の新聞記者を対象にした意識調査では、生活面の噂としての「感染拡大により自衛隊が県堺を封鎖し、食料等の入手が不可能になる」、スティグマを伴う噂としての「A 国人が故意に菌をばらまいている」、医学的な噂としての「感染者と道ですれ違っただけで感染する」の 3 点について、記者の重要度を調べたところ、生活面・医学面共に過半数が重要度が低いとし、スティグマの要素のある噂は 7 割が低いと回答した。勝田は噂に対して関心が低かった結果について、報道により噂を活性化させて風評被害やスティグマの発生を助長した過去の経験が関連していると考察している。。勝田は、新型インフルエンザパンデミック期において、「街のうわさを拾い上げて、専門家のコメントをつけて否定情報を出し、社会不安緩和に資する役回り」は公的機関だけではなく、マスメディアの力も必要であると述べている。

4　感染症パンデミック期における心理的支援

今回選択した 11 論文では、具体的な心理的支援について焦点をあてた報告は多く見られなかった。その中でも医療関係者を対象とした川添等[19]の研究では、新型インフルエンザ病棟開設時から、精神科医が、病院スタッフに日々連絡を入れ、対応していることが示されていた。また、精神科医が常時スタッフの様子を確認し、心理的負担の軽減に努めたり、精神科医と相談の上、心理士がナースステーションを訪問したりするなどの支援が報告されていた。

高校生に対して学校閉鎖時の部活動における心理的フォローを検討した畷等[17]の報告では、完全学校閉鎖の環境で特に不安を覚えている高校 3 年生男子を中心とした生徒に、セルフコンディショニングが行える動機付け等の心理的なコンディショニングを含めた心理的フォローの重要性を示していた。

Ⅳ　考察

1　研究の動向

1）文献の掲載年次と研究期間について

今回選定した全 11 論文のうち、新型インフルエンザ発生以前の 2008 年が 1 本、パンデミック期間とされる 2009 年が 2 本、終息後の 2010 年 5 本、2011 年 3 本となった。選定し

た全ての論文が、新型インフルエンザパンデミック期前後に集中しており、当時の新型インフルエンザへの関心の高さが伺われる。新型インフルエンザ等新興感染症パンデミックには、それぞれ流行の波があり、その状況に応じて社会の動きはもちろん、人々の心理にも影響される[18]。そのため本節では、実際の研究実施期間に関しても考察した。大見等と三島の2論文は、新型インフルエンザ発生以前の2008年に研究を実施した報告である。大見等はこの段階での新型インフルエンザは、鳥インフルエンザ（H5N1）のパンデミックを想定したものであり、弱毒性とされる新型インフルエンザ A（H1N１）パンデミック後の意識とは大きく異なる可能性が高く、適切な時期に同様の意識調査を実施し、比較する必要があると述べている。三島も同様に（H5N1）を想定したリスク認知とリスクコミュニケーションの研究であった。三島は病原力や感染力等（H5N1）と A（H1N１）は異なる点もあるが、この報告でのあきらかになった課題は新型インフルエンザ A（H1N１）にかなりの部分で共通すると考察している。同様に現在なおも、パンデミックにある COVID-19 と比較しても共通する点がは多くあると考えられる。このように新興感染症の過去のパンデミック経験から学び、次なる感染症に備えることは重要である。

新型インフルエンザ発生初期の2009年4月から翌年の3月までのパンデミック全期において電話相談の内容を分析した田辺等[18]の報告は、流行の波を国内発生早期・感染拡大期・まん延期・回復期、に分け分析している。流行の推移から電話相談の件数や相談内容を分析することで、流行の波の各時期の感染症に対する心理を把握することができる貴重なデータと思われ、今後の研究においても、流行の波それぞれに分析する必要がある。

国内発生期からまん延期に至るまでの期間で、研究を実施した報告は、5件（海後等[13]・及川等[14]・碓井等[15]・畷等[17]・田辺等[18]）であり、それぞれの流行期の状況を把握することができたのではないかと思われる。現在の COVID-19 パンデミック期においても多くの研究が報告されており、各波毎、変異株毎の比較をすることで、新たな知見を見出すことができると考えた。

２）対象者の属性と研究デザイン

対象者の属性として、最も多かったのが、大学生の6件（(海後等[13]・及川等[14]・碓井等[15]・大見等[16]・田代等[20]・勝見[22]）であった。大学生を対象とした研究は、大学構内で比較的容易にリクルートでき、データの回収も容易である。パンデミック期中、他機関との関わりに制限があり、大学生を対象として研究が多かったのではないかと考察した。

今回選定した全論文では、新型インフルエンザ感染者当事者の報告は1件もなかった。初期の「新型」としてのパンデミックは、2009年～2010の年という約1年の短い期間であり、その後季節性のインフルエンザに移行しており、「感染者」を対象とした研究が困難であったと考えた。

研究デザインでは、選定した11論文全て量的な研究であった。質問紙には今回パンデミックとなった新型インフルエンザに関する内容に改変したり、新たに開発されたりした尺

度が多くみられた。　勝見[22]の「新型インフルエンザに対する認知・態度尺度」では、新型インフルエンザに対する関心や態度、とらえ方について測定するために開発された尺度で、20 項目から成り立っている。「新型インフルエンザによる影響の予測尺度」は、新型インフルエンザの流行に伴って生ずると考えられた事項について、それらが起こる可能背についてどのように考えていたかを尋ねる項目で構成されている。また、「他人の行為に対する不快感の程度尺度」は、インフルエンザ流行期に感染拡大をもたらす可能性のある行為を他人がやっているのを目にした時、どの程度不快に感じるかを尋ねる尺度で 12 項目からなっている。　三島[21]の「インフルエンザのリスク認知尺度」は Slovic[25]のリスク認知評価尺度を A（H1N１）用にアレンジした尺度であり、「恐ろしさ」と「未知性」の 2 因子を構成する尺度となっている。現在の新型コロナ感染症に関する研究でも Slovic のリスク認知評価尺度を改変した尺度が使用した報告もある[26]。これらの尺度は、新興感染症に対応した尺度であり、COVID-19 感染症も含めた新たな振興感染症に備える参考資料になると思われる。

２　新型インフルエンザ流行に対する不安やストレスについて

新型インフルエンザパンデミック期におけるストレスや不安に関する内容を分析することは、同じ新興感染症として現在もパンデミック期にある COVID-19 の心理的支援を考える上で重要な情報となる。

海後等[13]らと及川等[14]は、双方ともに学生を対象としパンデミック期間に複数回調査している。海後等の報告では、5 月と 9 月に調査を行い、新型インフルエンザに対する「重要度」や「不安感」は、5 月より 9 月のほうが高くなっていた。海後等はこの結果に対して、5 月より 9 月のほうが実際の感染リスクが高くなっているからではないかと考察している。対して及川等の 4 月から 7 月の 4 期にわたる調査の結果では、新型インフルエンザの不安感情は期を重ねるごとに低下している。この結果に対して及川等は新型インフルエンザに関する情報が浸透することで感情反応の飽和し、不安感情が低下したと考察している。海後等と及川等の結果の相違に関して、調査回数のたびに不安感情が低下した及川等の結果は、縦断研究におけるバイアスの発生が推測される。縦断研究を行う際、縦断データにおける欠点として知られている１つとして、繰り返しの調査による作業への慣れや記憶等がデータにゆがみ（バイアス）を与える可能性に考慮する必要があるといわれている[27]。及川等の 4 期にわたって 1 か月毎に実施された調査では、このようなバイアスが生じた可能性がうかがわれる。流行の波がある新興感染症に関して、その推移に応じて調査する縦断的な研究は大変意義があるが、縦断研究において生じるバイアスに関しても加味しながら、調査する時期と期間に対して十分に考慮する必要があると考えた。

高校生を対象とした畷等[17]の研究では、易感染性については「感染に気を付けたい」という意識の者が 8 割を占めていたものの自由記述では「関係ない」「気にならない」と記述した生徒が 8 割に及んでいた。この報告では、身近で感染者が確認されている環境下での若者の危機感がうかがわれる一方、「無関係」とする心理も併存することが示された。

新型インフルエンザに対する意識として、年齢層別に比較した大見[16]等の報告では、学生は一般市民と比較して不安感や危機感が薄いと報告している。大見等は、新型インフルエンザに対する意識の低さや無防備な生活習慣を伴う若い世代を新たな感染症における脆弱層と指摘しており、若い世代に対する「健康教育」の重要性を提言している。畷等と大見等の報告において、若者は感染自体に対する不安はあまり見られないことが見出された。現在パンデミック下にあるCOVID-19に関しては、若い世代のリスクが少ないとされているところから、その傾向はより高い可能性が考えられる。

子育て世代対象をとした電話相談の内容を分析した田辺等[18]は、特に0歳から4歳児の子どもを持つ保護者からの相談が顕著であったことを報告している。また、相談をする口調から、不安感が極度に募る様子を感じたと示している。全国的なインターネットアンケートを行った三島[21]の報告でも、子どもを持つ人ほど、新型インフルエンザに関する認知度が高いと示しており、子どもを持つ親にとっては、新興感染症に対する不安や恐怖は多いと考えた。現在の長期にわたるコロナ禍においても、保護者の不安やストレスが大きく、加えて、発達の遅れ、生活習慣の乱れが全国の乳幼児健診担当者の報告から示されている[28]。以上のことから、子どもを持つ親の不安感は強く、特に乳幼児の保護者の支援が重要であると考えた。

本稿で選定した論文の中で医療従事者を対象とした論文は、川添等[19]の報告1件であった。川添等の報告では、IES得点、ストレス得点共に高い数値であり、新興感染症パンデミック時に、直接患者と接する医療従事者に対する心理的支援の必要性を訴えている。今回の医療従事者に関する報告が少なかったのは、この感染症が弱毒であったこと、日本におけるパンデミック期が比較的短期であったことからの結果だと考えた。感染症流行時における医療従事者のメンタルヘルスに関する報告は、2003年の重症急性呼吸器症候群（SARS）の流行時より重要視され[29]多くの研究者がその重要性を強調している[30]。現在なおもパンデミック期であるCOVID-19や新たな感染症の発生に対して、今後も医療従事に対するメンタルヘルスや社会的支援は継続的行われるべき重要な課題である。

感染症の世界的流行を表現する用語に焦点をあて、新型インフルエンザ流行における不安やストレスを検討した碓井[15]の研究では、「世界的流行」「パンデミック」「感染爆発」という感染症の世界的流行を表現する3種の用語に対する不安感の評定を報告している。碓井は、マスメディアは、新しい出来事に関して、一般的になじみの薄い「新語」「カタカナ語」を使用し、必要以上に不安を高める可能性があると示している。実際の結果では、3種の用語ともに不安感が生じたが、「パンデミック」といい言葉は他の用語よりも不安感が低いと報告している。短期大学1年生女子を対象としたこの調査では、被験者の中には「パンデミック」の意味がわからないと回答した者もおり、パンデミックの意味を理解しない学生も含まれているのではないかと考察している。新型インフルエンザパンデミック期において、若者の間ではまだ「パンデミック」の言葉が浸透していなかった可能性も伺われる。しかしながら、コロナ禍においては、パンデミック以外に多くの新語、カタカナ語を使用して

いる。クラスター、ロックダウン、ソーシャルディスタンス、ステイホーム等のカタカナ語がマスコミを通して頻繁に報道されるようになった。専門用語を含むこのようなカタカナ語や新語は人々の間で不安を生じやすいと指摘されることもある[31)㉜)]。また、「ソーシャルディスタンス」“社会的距離”は、もともとは、物理的な距離ではなく社会的・心理的距離の意味[33)]であったものが、現在では、感染予防にための物理的な距離として、本来の意味が変化している。このような新語は、意味がわからず言葉が独り歩きし、不安が拡大することも懸念され、その都度丁寧にわかりやすく解説することが必要であると考える。

３　新型インフルエンザに関する情報提供のあり方とスティグマについて

１）感染症予防としての情報提供について

感染予防としての情報提供のあり方として、大学生を対象とした田代等[20)]の報告では、感染対策等が掲示している掲示板やホームページから情報収集する学生が少なく、大学側は全学生に確実に情報を提供できる伝達手段を見直すべきと論じている。さらに、学生に対しても適切な感染防御対策を実行すべきと述べている。これは、及川[14)]の報告でも同様であり、感染拡大期においても、学生の予防行動が低くなっていると示している。学生への情報提供のあり方として、勝田[34)]は、学生への情報提供は量を「一口サイズ」にして直接個々に届くような形で提供することを推奨している。具体的には携帯メールを使用し、毎日、その日の状況、基礎知識の反復といった内容を継続して提供することが望ましいと記している。以上のように新型インフルエンザが若い世代のほうが、リスクが高いとされていたのにもかかわらず、学生の予防行動は低いという結果に至っている。COVID-19 の場合は、若い世代はリスクが低いとされているためよりいっそう予防行動が懸念され、厚生労働省等は、若年層向けの情報発信を強化している[35)]。感染症パンデミック期に若い世代にどのように感染予防をよびかけるかが今後の課題であり、健康教育として、子どもの頃より、行うことも必要ではないかと考えた。実際に本稿の研究Ｉにおいて、小児用の感染予防に関するガイドラインも多く作成されおり、健康教育の一環として小児期より継続して感染症予防教育を行うことも重要と考えられる。

２）情報提供とリスク認知

リスク認知とは、人や物に対して害を及ぼす可能性がある現象や活動の特質を人々が評価する心理的イメージのことをいう[36)]。感染症に関するリスク認知とは、感染症が人や動物あるいは物に対して害を及ぼす可能性について人々が評価している心理的イメージ[36)]とされ、感染症自体のリスク、肉体的健康・心理的健康・経済・環境・主権・差別の７側面を評価する報告もある[37)]。また、リスク認知が高ければ、安全行動（感染予防行動・リスク回避行動）も多くなることが報告されている[38)39)]。COVID-19 に関してもリスク認知が高い人ほど、感染予防行動を行う頻度が高いことが確認されている[40)]

本稿での三島[21)]の報告で、新型インフルエンザ関する情報が質量ともに不足していると

いう回答が８割に及んだと報告している。感染症等の情報が質量ともに不足し、不安等の心理状態が長く続くと「デマ」や「流言」が発生することは、過去の災害からも示されており[21]、情報不足の状態は避けなければいけない。しかしながら及川等[14]の報告では、リスクや予防行動の関する情報が増加しても感情飽和や楽観性バイアスが生じ、予防行動につながらないとしている。リスク認知に関しては、むろん世代差や個人差はあり[41]、若年層である大学生が対象であったことも一因と考えられるが、情報量だけでは行動変容を促すリスク認知にいたらないことが伺われる。また、三島は、リスク認知の高い若い世代のほうが、感染予防に対する意識が低く、リスク認知の低い高齢者のほうが高いというねじれを引き起こしていると示している。このようなねじれは、新型インフルエンザパンデミック期前の調査のため、高齢者は新型インフルエンザを季節性インフルエンザの延長ととらえていることが一因と考えた。

情報量に関わらず、リスク認知のレベルが不足または過剰である場合は、どちらも問題が生じるとされている。リスク認知が低すぎる場合、安全行動につながらず、反対に高レベルになると不安、ストレス、うつ病などの精神的健康問題の割合を増加させると言われている[42]。　人々が適切なリスク認知を行えるための質量ともにそろったリスクコミュニケーションのあり方が重要となってくる。

３）リスクコミュニケーションのありかたとスティグマ

社会への関心の有無に関する社会考慮と新型インフルエンザの流行に対する態度の関連について検討した勝見[22]の報告では、社会考慮が高い者は　新型インフルエンザについてリスク認知が高く、情報を得ようとする傾向にあり、なおかつ感染予防行動に熱心であったことを明らかにしている。この結果より、勝見は社会考慮を高めることが感染症の流行抑制に役立つ可能性があると考察している。しかし、一方で社会考慮の高い人は感染症に対する不安感が強く、感染予防に熱心でない者に対して、より不快感を抱きやすいという指摘も述べている。この点に関して、社会考慮を高めることにより、「感染したのは、予防を怠った本人の責任」ととらえる内在的公正推論が発生しやすく、差別や偏見、社会的分断が発生することも考えられる。特に日本人は内在的公正推論が高いと言われており[43]、リスク認知が内在的公正推論に結びつかないようにすることが重要である。また、碓井[15]の研究でも、感染拡大期に予防行動をとらないプロトタイプに対して否定的なイメージをもつ人ほど感染予防行動をとろうとする結果を示している。このことより、リスク認知の高い者は安全行動の１つである感染予防行動を起こしやすいが、危険回避行動として、感染者や感染者と関わる人々に対する差別行動を起こす可能性が推測できる。リスク認知を高めることは、感染予防行動を促進するが、危険回避行動として差別的行動につながる二面性をもっていることを加味しなければならない。そのためには、スティグマや差別的行動が発生させないリスクコミュニケーションのありかたが重要となる。

スティグマを発生させないリスクコミュニケーションの在り方として、蛯名[44]は、①信

頼を構築し、リスク認知を低くする　②人間性を否定する伝え方をしない　③リスク情報と予防をセットで伝える　3点を提言している。1点目の「信頼を構築し、リスク認知を低くする」に関して、恐怖感情を伴うリスク認知を低めると確かにスティグマ発生を抑止することができるが、感染予防行動も少なくなる可能性が生まれてくる。蛯名はこのような状況において、行政等のリスク管理者が「適切に管理できている」と人々に信頼してもらうことが不可欠だと述べている。三島[21]の報告では、新型インフルエンザ発生初期において、政府の情報発信不と積極性の不足からの「未知」「恐ろしさ」というリスクイメージ持った人々の不安と、感染者や関係者への批判・中傷・差別的な発言、デマの発生は無関係ではないと考察している。スティグマを発生させないリスクコミュニケーションは、発信側と受信側の信頼関係が重要なカギとなることが考えられる。次に2点目の「人間性を否定する伝え方をしない」に関して、　実際にテレビのワイドショーをはじめ、報道機関までが、感染者を加害者と呼び、若い世代を「運び屋」と呼び犯罪を想起させるような表現や人間性を否定する用語を無意識の使用する傾向がある。マスコミをはじめ、私達は、このような用語を無意識に使用しないよう注意する必要がある。3点目の「リスク情報と対処・予防行動をセットにする」について、蛯名は恐怖感情を引き起こすリスクについて情報発信する場合は、有効性の高いリスク軽減行動を伝えることが重要と述べている。この点に関して、マスメディアの情報提供の在り方とスティグマの発生について、新聞記者の意識調査を行った勝田[24]は「事実ではない噂」も拾い上げ、「噂」を検証し否定情報を積極的に報道することが必要と考察している。これは「リスクとリスク対処をセットで発信」と類似の手続きであり、マスメディアにおけるリスクコミュニケーションのあり方としては重要な視点と考えられる。さらに、蛯名は、リスクの誇張は厳禁であると述べている。この点においても報道のあり方の重要性が示されている。過去の反省として、新型インフルエンザに感染した高校生が関西圏で発見された際に、当時の厚労省大臣の緊急発表が、国民のリスク認知を高め、地域に対する中傷や風評被害が起こっている[45]。コロナ禍においても、差別や偏見を助長しない報道の在り方について山中等は「－新型コロナウイルス感染症対策に関する、研究者・臨床家から報道機関への要望書」を2020年に提出している[46]。これを受けて、報道陣も新型コロナウイルス感染症の差別・偏見問題に関する共同声明[47]を取りまとめたが、まだまだ課題として残っている。

過去より人類は、多くの感染症パンデミックを経験し、その都度感染症に関する情報収集と発信を行ってきた。特に新型インフルエンザパンデミック期においては、リスクマネジメントとリスクコミュニケーションの重要性が注目され、WHOでも2017年にインフルエンザリスクマネジメントに関する基本方針を提示している[48][49]。日本でもリスクコミュニケーションの必要性は新型インフルエンザパンデミック後も、2011 年の東日本大震災の後も課題として指摘され続けてきたが、政府をはじめ各行政機関においても実施体制が整っていないのが現実である[50]。さらに、COVID-19パンデミック下においては、公的機関による情報発信だけではなく、民間企業や報道機関の参入も増えており[51]、加えてSNS等発信ツー

ルの多様化が進む中で、スティグマを発生させない適切なリスクココミュニケーションのあり方が今後の重要な課題となる。

４　感染症パンデミック期における心理的支援

本稿では、心理的支援に関する報告は、2 件のみであった。1 件は川添等[19]の医療従事者対応の報告である。現在の COVID-19 パンデミック期においても、医療従事者に対する心理支援に関する報告やガイドラインは多く存在しており[30]、川添等の報告も今後の感染症パンデミックには、役立つ資料となると考えられる。高校生を対象とした畷等[17]の心理的支援に関する報告は、学校閉鎖環境の中での部活動を行っている高校生に心理的コンディショニングを行うものであった。心理的コンディショニングとは、スポーツ心理学等の分野でスポーツ選手の心理面に焦点をあてたコンディショニングのことである[52]。畷等は学校閉鎖環境にある高校生の中で引退を控えた高校 3 年生の不安が大きく、心理コンディショニングの導入が必要と示している。この報告は、対象が限定的な支援であるが、本稿の研究Ⅰにおいて、コロナ禍における幼児・児童・生徒支援で「休校中」「学校再開時」各々の状況に合わせたきめ細かいガイドラインが作成されている。今後もこのような対象別、状況別に支援できるようなガイドラインは継続して作成され、支援者にとっても重要な資料となると考えた。　以上のように今回選定した文献では、具体的な心理的支援の報告は多くみられなかった。この点について、新型インフルエンザ罹患者を対象とした報告がなかったこと、新型インフルエンザパンデミック期の期間が 1 年余りであったことなどのよるものと考えた。しかしながら、新型インフルエンザも現在の COVID-19 と同様に入院措置がとられ、一定期間の隔離を余儀なくされる環境であり、患者の心理的な負担も大きかったと推測できる。さらに感染者に対する差別や風評被害も多くあったことは事実であり、感染者に対する心のケアは重要であったと思われる。COVID-19、そして新たな感染症パンデミックに向けて今後も罹患者に対する心理的ケアを継続して充実させることは重要と考えた。

結語（総合考察）

本稿では、感染症パンデミック期の心理的影響とその対策について、スティグマに焦点をあて、ガイドライン作成の資料収集を目的とした研究 1 と文献レビューの研究Ⅱを実施した。研究Ⅰでは、前年度作成した資料にスティグマに関する項目を加え、マニュアル・ガイドラインリストを作成した。また、研究Ⅱでは、2009 年にパンデミックを起こした新型インフルエンザを対象に、パンデミック期の人々の心理や情報提供、リスクコミュニケーションのあり方とスティグマに焦点をあて、先行研究のレビューを実施した。

研究Ⅰでは、89 件（前回 30 件を含む）のガイドラインを選出した。前年度のリストでは、医療従事者や関係者を対象読者としたガイドラインが多くあり、子どもや家族、患者等を対象としたガイドラインは数件であった。しかし、今年度は、教育・保育関係者・子どもと保

護者用のガイドラインを30件抽出した。また、スティグマに関係するガイドラインを15件見出すができた。今年度抽出したガイドラインは、対象者や状況が前年度より細分化され、現場が対応できる内容となっていた。また、利用者のニーズに応えた内容で改定されていた資料も多くあった。今後も状況に合った新たなガイドラインが作成されると考えられ、本研究も継続して実施する必要があると思われた。

研究Ⅱでは、新型インフルエンザを対象に、パンデミック期の人々の不安やストレス、感染症の情報提供のありかたやリスクコミュニケーションとスティグマに焦点をあて、先行研究をレビューした。感染に対する不安については、大学生等の若い世代は、感染に対してあまり不安を感じることがなく、予防行動が低いことが示唆された。対して小さな子どもをもつ世代は不安が大きく、新興感染症に対する不安は、世代間に差異があることが示された。パンデミック期において、年齢層に応じた情報提供のあり方が必要であり、特に若い世代へは、多様な情報発信が重要であることが見出された。また、感染症パンデミック期のリスクコミュニケーションのありかたとして、リスク認知を高めると、感染予防行動は高くなるが、危険回避行動として、感染者を退ける差別や偏見、スティグマが発生する可能性が示唆され、今後はスティグマを発生させないリスクコミュニケーションのあり方が重要となることが示された。

文献

1)UN　Policy Brief:COVID-19 and the　Need for Actio　on Mental Health.13May　2020

2)毎日新聞デジタル．医療（コロナ対策）　偏見や分断に苦しみ　風評被害「防いでほしかった」2021.10.8

3)水巻中正看護師との連携感をもちながら、新型コロナウィルス感染症を正しく恐れ、闘う．看護展望.46（10）10-12.2021

4)Corrigan, P. W., & Penn, D. L.. Lessons from　social psychology on discrediting psychiatric stigma.American Psychologist, 54, 765-776.1999

5) American Psychological Association: Combating　bias and stigma related to COVID-19. How to stop　the xenophobia that’s spreading along with the　coronavirus. 2020

6)　重村淳.去の事例から学ぶcovid-19（新型コロナウィルス感染症）へのメンタルヘルス対策．DEPRESSION JOURNAL, 9（2),.60-61.2021

7WHO.型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する社会的スティグマの防止と対応のガイド.2020.2

8)高野公輔,稲田,健,村岡,寛之,井上敦子,安田妙子,赤穂理絵,西村勝治．COVID-19のメンタルヘルスケア―感染症パンデミックにおける精神科の役割―．東京女子医科大学雑誌91(1)

９)及川馨.新型インフルエンザと患者への情報伝達-登校・登園の基準，濃厚接触者の処遇などについての問題点など．日本小児科医会会報，(39).27-32.2010

10)毎日新聞デジタル.新型コロナ　評被害,談呼びかけ,戸市が窓口開設「冷静な行動を」／兵庫.2020.4.17
11)毎日新聞デジタル.感染者受け入れ病院従事者の子、保育所「拒否」相次ぐ　厚労省、是正を通知.2020.４.22
12)木戸芳史.PRISMA システマティック・レビューおよびメタアナリシスの報告における望ましい報告項目.看護研究. 53. 34-39.2020
13)海後宗男,康雪梅,蔡莉,他. A 型 H1N1 亜型インフルエンザ報道の影響に関する研究. 筑波大学地域研究. (32)59-80.2011
14 及川晴,及川昌典.危機的状況での認知, 感情, 行動の変化-新型インフルエンザへの対応-.心理学研究 81(4)420-425.2010
15)碓井真史.新型インフルエンザ(H1N1)のリスク関連行動に及ぼすプロトタイプ・イメージと不安の影響. 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究.(3) 31-36.2009
16)大見広規,舟根妃都美,結城,佳子,播本雅津子,寺山和幸. 市民、学生の新型インフルエンザ対策についての意識調査インターネット調査と比較して.北海道公衆衛生学雑誌.23(2) 80-85.2010
17)畷素代,佐久間春夫.新型インフルエンザ感染拡大が高校生の心理面に及ぼした影響.奈良体育学会研究年報. (14)13-19.2009
18)田辺則子,高橋敏子,田原卓浩.電話相談にみる新型インフルエンザ(A/H1N1)pdm 流行時のリスクコミュニケーション.外来小児科.13(3)313-318.2010
19)川添文子,高宮静男,磯部昌憲,今井必生,松石邦隆.大規模感染症(新型インフルエンザA:H1N1)への対応が医療従事者に与える心理的影響.心身医学.50(10)969-972.2010
20)田代隆良,諫山有葵奈,川原享子.長崎大学学生の新型インフルエンザ感染と行動. 保健学研究.23(2)7-14.2011
21)三島和子.新型インフルエンザのリスク認知とリスクコミュニケーションのあり方に関する調査研究日本リスク研究学会誌.20(1) 59-68.2010
22)勝見吉彰.社会考慮と新型インフルエンザ(A/H1N1)に対する態度との関連. 人間と科学.11(1)79-87.2011
23)斎藤和志.社会的迷惑行為と社会を考慮すること. 愛知淑徳大学論集文学部篇(24) 67-77.1999
24)勝田吉彰.新型インフルエンザパンデミックにおける社会不安緩和に向けた報道の考察マスメディア関係者の意識調査から新型インフルエンザ報道への提言.日本渡航医学会誌.2(1)4-10.2008
25) Slovic, P. Perception of Risk, Science,pp.280-285.1987
26)市川葵,小林正英,中本健太,LUBINGYING,谷口綾子.新型コロナウイルスのリスクイメージーリスク認知と信頼に着目してー・新型コロナウイルス拡大期における手洗い行動の規定因・新型コロナウイルス感染症による人々への心理的影響.

https://www.risk.tsukuba.ac.jp/pdf/group-work2020/report/2020_group_02_final.pdf
27)荘島,宏二郎,宇佐美慧,吉武尚美,高橋雄介.縦断データ分析のはじめの一歩と二歩. 教育心理学年報.(56)291-298.2017
28)佐々木渓円,杉浦至郎,山崎嘉久,小枝達也. 全国市区町村調査からみた新型コロナウイルス感染症の流行下における乳幼児と保護者の状況.小児保健研究(80) suppl 号.171.2021
29)Maunder.R. The experience of the 2003 SARS outbreak as a traumatic stress among frontline healthcare workers in Toronto: lessons learned. Philos Trans R Soc Lond B Biol Sci359(1447)1117-25.2004
30)瀬藤乃理子,竹林由武,前田正治.新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行時における医療従事者のメンタルヘルス支援 ～感染対応者への心理社会的支援に関する文献レビュー産業ストレス研究.27(3)351-361.2020
31)西日本新聞.オーバーシュート、ロックダウン…専門用語なぜカタカナ語ばかり.2020.3.28 配信
32)東京新聞.コロナ関連カタカナ語「分かりやすい日本語表記を.2020.6.16 配信
33)Park, R. E. The concept of Social Distance: As applied to the study of Rocial Relation. Journal of Applied Sociology,8,334-344.1924.
34)勝田吉彰.新型インフルエンザパンデミック時における社会不安最小化に向けての対策-大学の場における検討-.近畿福祉大学紀要.8(1) 77-79.2007
35)厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症」に関する若年層向けの情報発信を強化します.https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_10613.html.2020.331
36)三橋,睦子,辛銀娟,大坪靖直. SARS 集団発生の経験をとおした感染症の知識とリスク認知との関連性. 久留米医学会雑誌.70(3-4) 78-86.2007
37)武田美亜,小森めぐみ,高木彩新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行によるリスク認知と行動への影響(2)―感染回避のための施策により発生した社会生活の諸側面に対するリスク認知の検討―.日本心理学会大会発表論文集 84(0)49,.2020
38)Bults M, Beaujean DJ, Richardus JH, Voeten HA. Perceptions and behavioral responses of the general public during the 2009 influenza A (H1N1) pandemic: a systematic review. Disaster Med Public Health Prep. 9(2):207–19.2015
39)李光鎬.メディアシニシズムと新型コロナウイルス感染症に対するリスク認知および市民的価値観の関連(1).慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要.(91) 59-66.2021
40)高木彩,小森めぐみ,武田美亜. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行によるリスク認知と行動への影響 (3) ―個人の感染予防行動に関わる要因の検討―. 日本心理学会大会発表論文集.84(0)050.2020
41) Floyd DL, Prentice-Dunn S, Rogers RW. A meta-analysis of research on protection motivation theory. Journal of Applied Social Psychology. 30(2):407–429.2000
42) Betancourt TS, Brennan RT, Vinck P, VanderWeele TJ, Spencer-Walters D, Jeong J, et al.

Associations between Mental Health and Ebola-Related Health Behaviors: A Regionally Representative Cross-sectional Survey in Post-conflict Sierra Leone. PLoS Med. 13(8)2016
43)三浦麻子,平石界,中西大輔,Andrea Ortolani.新型コロナウィルス感染禍に対する態度の国際比較 -自業自得-自粛警察は日本にユニークなのか-.日本社会心理学会第 61 回大会発表論文集.199.2020
44)蝦名玲子.クライシス・緊急事態リスクコミュニケーション(第 11 回)新型コロナパンデミック対応の困難事例 自宅療養とスティグマ問題.公衆衛生 86(1)78-81,2021
45)上野眞也.2009 年新型インフルエンザ対策に関する政策分析. 熊本大学政策研究(3)3-14.2011
46)山中伸弥他「ーみんなで共に、走っていこうー新型コロナウイルス感染症対策に関する、者・臨床家から報道機関への要望書」2020 年 4 月 24 日
47)日本新聞協会,日本民間放送連盟「新型コロナウイルス感染症の差別・偏見問題に関する共同声明」2020 年 5 月 21 日
48)WHO. http://www.who.int/foodsafety/micro/riskcommunication/en/print.html.現在閲覧不能. WHO Outbreak communication guidelines.
http://www.kankyokansen.org/uploads/uploads/files/jsipc/WHO_Outbreak%20communication%20guidelines.pdf
49)勝田吉彰. 新型インフルエンザパンデミックにおけるリスクコミュニケーションの実情. 近畿医療福祉大学紀要.11(1) 15-22.2010
50)武藤香織. COVID-19 と倫理的法的社会的課題 (ELSI):偏見・差別とリスクコミュニケーションを中心に. 日本内科学会雑誌.109(11) 2334-2338.2020
51)荒堀智彦. ポスト・コロナ社会における感染症の健康危機管理情報とリスクコミュニケーション. 日本地理学会発表要旨集. 2020a(0)145.2020
52)高妻容一メンタル(心理的)コンディショニング (特集 アスリートのコンディショニング).臨床スポーツ医学.35(8) 836-842.2018